



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	漁村活性化における女性たちの役割と可能性：北海道神恵内村を事例に
Author(s)	林, 天玉
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	修士(文学)
Issue Date	2024-03-25
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/91459
Type	master thesis
File Information	2023Lin.pdf



令和5年度修士論文

漁村活性化における女性たちの役割と可能性
—北海道神恵内村を事例に—

文学院 人間科学専攻 地域科学研究室

指導教員 宮内泰介

学生番号 13223107

氏名 林 天玉

目次

1 序論.....	3
1-1 背景と目的	3
1-2 研究方法	4
1-3 論文構成	6
2 先行研究.....	7
2-1 2000 年代以前の漁村女性に関する研究	7
2-2 2000 年代以後の漁村女性に関する研究	7
3 調査地域の概要.....	10
3-1 古宇郡地域神恵内村（カモエナイ）とは	10
3-2 神恵内村の歴史	11
4 漁村で暮らしている女性たち―漁家の娘、嫁、女性漁師・移住女性.....	13
4-1 漁村女性たちの生活	13
4-1-1 変化に伴う多様な生活	13
4-1-2 村の祭りにおける女性たち	17
4-2 漁村女性たちの労働	19
4-2-1 浜の女性たちの仕事	19
4-2-2 神恵内村漁協女性部と女性部の活動	22
4-2-3 地域社会における女性部加工品事業の意義	25
5 村への愛着	28
5-1 人の繋がりと場所の繋がり	28
5-1-1 人との繋がりから生まれた愛着	28
5-1-2 帰ってきてから少しずつ生まれた愛着	31
5-2 愛着を持つその先には	34
5-2-1 若い世代の女性が道を選ぶ理由	34

5-2-2 愛着を持ちながら起業する女性	35
6 地域コミュニティの変容と女性活動によって形成したネットワーク	40
6-1 地域コミュニティの衰退と復活	40
6-1-1 失われた場所と取り戻した伝統的活動	40
6-1-1 漁村女性にとってのコミュニケーションの場	41
6-1-2 子供の教育を介した地域コミュニティ	43
6-1-3 「内部のつながり重視」と漁村女性の行動力	45
6-2 女性の橋渡し型ネットワーク	47
6-2-1 女性リーダーの努力	47
6-2-1 女性部の「橋渡し型」ネットワーク	49
6-3 地域ブランド作りと村の発展における課題	53
6-3-1 地域ブランド作りにおける認識のズレ	53
6-3-2 村の活性化を阻むもの一情報流通、移住者の難点と認知度	55
7 おわりに	58
7-1 地域における女性の力	58
7-2 今後の展望・課題	60
謝辞	62
補足資料：神恵内村調査協力者概要	63
参考文献・参考資料	66

1 序論

1-1 背景と目的

漁村とは、漁場近くの岸などに立地し、経済の基盤を魚類の捕獲と魚介類の水揚げに負っている村である。漁村は多様な水産資源を水揚げし、新鮮で安全な水産物を安定的に供給する拠点として極めて重要な役割を果たしている。

その他、漁村には、生命・財産の保全、生態系保全、交流の場の形成、地域社会の維持・形成などの多様化する国民のニーズに対応する機能が重視され（藤田ほか 2015）、地域経済・文化への貢献、公益的機能の発揮などにもさまざまな役割を果たしている。

しかし日本では近年、魚価の低迷、生産コストの増大などの原因を背景に、漁家の漁獲量や所得が減少し、担い手・後継者不足や雇用の減少といった様々な問題を抱えており、漁村の基幹産業としての水産業の衰退が続いている。また、水産庁（2009）によれば、厳しい生活環境や生産環境、災害に対する脆弱性といった問題と共に、多くの漁村においては、水産業及びその周辺産業を含めた就業機会の減少や人口の流出・減少による社会的サービスの低下、さらには著しい過疎化、高齢化などの問題が深刻化している。このような状況に対し、水産庁は漁村がその役割を今後とも果たしていくためには、漁村の活力を向上させ、維持していくことが不可欠であると指摘した。

近代化以前は、漁業は農業と同じく女性が生産の一端を担っていたが、商品生産を目指す近代漁業になると、女性は漁業から排除されていき（中道 2008）、漁業は「男性の産業」というイメージが強くなった。とは言え、漁業は男性だけでは存在できない。多くの漁村女性たちは陸上作業を通じて漁業に貢献し、自ら船に乗ったり海に潜ったりしている女性もいる。漁村における地域の課題を解決するため、自ら直売所や郷土料理を提供し、水産物の付加価値を向上させ地域ブランド化するなどをしている女性が、漁村活性化に資する様々な取組を推進した。特に、漁業労働者の減少と高齢化が進むにつれて、漁業でも農業でも女性労働者と後継者が注目されるようになった。

農漁業女性への注目の始まりは、1990 年代前半、農山漁村の女性たちが農漁業生産の重要な担い手、地域社会における様々な活動に重要な役割、地域活性化にもかなりの部分を担っていたことを認識して来た（熊井ほか 1992）。同時に、1992 年に農林水産省が「2001 年に向けて、新しい農山漁村の女性」を発表した以後、女性の社会参加の働きが活発になった。それをきっかけとして、農山漁村女性への研究が活発化し、政策も様々な支援策が出た（中道 1995）。

更に、1999 年に男女共同参画社会基本法（男女共同参画局,平成 11 年法律第 78 号）が公布・施行され、それに伴い日本では、さまざまな分野で女性政策が浸透しつつある。水産基本法（2001）においては、女性の水産業における役割を適正に評価すると共に、女性が自らの意思によって水産業及びこれに関連する活動に参画する機会を確保するための環境整備

を推進することが指摘された。

徳野ほか（2014）によると、広い年齢層の女性たちが農山漁村の将来を左右する重要な存在であり、一層注目されるようになっている。彼女たちは地域社会を支え、活性化させる重要な役割を果たしていると指摘されている。

社会や国の政策から見ると、農山漁村の女性たちの立場は向上してきたが、中道（2008）の研究によれば、女性政策はまだ一部にしか浸透していない状況であり、漁業における女性の役割についてはほとんど見えていないというのが現状である。特に、現在の政策と研究が注目しているのは主に農村女性で、農業分野に比べ漁村女性への注目は不十分であり、その現状も明らかにされていない部分が多い（飯島 2018）。

漁業・漁村では、多くの女性がまだ「獲る」現場から排除されており、その場にはいなかった。しかし、漁村としては上に書いたように、実際に「獲る」現場以外に、「獲る」前の準備や「獲る」後の選別から加工、販売までには、女性たちがずっといた。「獲る」ことを重視する社会では、「獲る」現場にいない女性が見えない存在になった（中道 2008）。

そこで、本研究では、漁業において見えない存在となっている漁村の女性たちに焦点を当て、彼女たちが漁村や漁業でどのような重要な役割を担っているのかを明らかにしたいと考えている。彼女たちの生活と仕事の現状と役割を明らかにすることによって、今まで社会に注目されることが少ない女性たちの姿を「可視化」にする。少しずつ見えるようになっていくと、漁村女性への注目が重視されるだと考えられるようになってきたのだろう。

以上より本研究は、今まであまり調査されてこなかった漁村地域である北海道古宇郡地域神恵内村を対象として、漁村女性の暮らしを紹介していくことで、（1）聞き取り調査から、漁村女性たちの生活と作業の実態を明らかにすることで、生活、経済、地域社会における女性たちの役割を明らかにすること、（2）女性たちのいろいろな活動によって形成されたネットワークを考察し、漁村活性化における彼女たちが持っている「力」と可能性を検討することの2つを目的とする。

1-2 研究方法

以上の背景や研究目的を踏まえ、本研究においては聞き取り調査、参与観察、文献調査を行った。聞き取り調査は北海道神恵内村で行い、対象者は神恵内村で暮らしている人たち、また仕事の関係で村に来て住んでいる人たちである。

主な聞き取り調査と参与観察の対象は「漁村女性」であるが、地域女性の役割と彼女たちの立場をより全面的に考察したいという思いから、地域男性にも聞き取り調査を行った。

そこで、本研究での「漁村女性」の範囲を定義したい。本研究では、漁業に直接関わる女性だけでなく、漁村で暮らしているすべての女性を「漁村女性」として考察した。なお、本稿での「漁村女性」の対象範囲は、①直接漁業に関わる女性たち②女性部で活動している女性たち③漁村のお嫁になる・移住する女性たち④漁村に生まれ育った女性たち、を含めてい

る。

聞き取り調査の内容では、①人生経緯・家族関係・現状②各地区女性部について③漁業に関する仕事内容④他の地域活動・家業内容 を含めていた。

2022年10月～2023年11月の間で神恵内村に5回現地を訪れ、16名の方々に聞き取り調査を行った。また、北海道漁村女性たちの現状をより理解する思いから、神恵内村以外にも、苫小牧、石狩・厚田・浜益、小樽市忍路の5つの現地を訪れて、漁協女性部などの7名の方々に聞き取り調査を行った。

神恵内村での内訳は以下の表-1通りである。聞き取り対象者のうち、60代～80代が2名、40代～50代が5名、20代～30代が9名だった。また、女性9人、男性7人だった。

表-1 聞き取り対象者一覧（神恵内村）

番号	名前	性別	年齢	生年	出身	仕事	ほか	調査実施時間
1	EC	女	67	1956	美国町	前女性部部長	浜のアルバイトをしていて、村の人間関係に感動する	2023年7月
2	MY	女*	55	1968	神恵内	女性部部長; 自営漁業	コロナ時期に色んな組織と連携して女性部の商品開発を行った	2022年10月 2023年2月 2023年11月
3	NY	女	53	1970	神恵内	古宇郡漁協管理部課長補佐	26歳から古宇郡漁協に転職し、女性部に長い時間のお付き合い	2022年10月 2023年2月 2023年11月
4	IM	女	47	1976	神恵内	居酒屋経営者	旅行村のアルバイトをしていて、夫と一緒に居酒屋を経営している	2023年11月
5	YK	女	46	1977	神恵内	民宿経営者	17個地域組織に参加している、村の活性化に真剣に取り組んでいる	2023年5月 2023年11月
6	YH	女	39	1984	札幌	漫画家	移住者(6年目)、村と都市の違さを感じてる	2023年11月
7	OS	女	34	1989	岡山	地域おこし協力隊員 1年目	移住者、女性部の新たな商品開発に力を入れる	2023年2月 2023年11月
8	YM	女**	31	1992	共和町	自営漁業のネット販売と発信	移住者（実家が農業）、村で初めての漁業ネット販売	2023年5月
9	MA	女	20	2003	神恵内	札幌国際大学観光学	村の祭り文化を継承と村の活性化に貢献したい	2023年7月
10	IK	男	82	1941	神恵内	元役場職員	村の「生き字引」として歴史を非常に詳しく知っている	2023年11月
11	MS	男*	55	1968	神恵内	古宇郡漁協理事; 自営漁業; 漁師	札幌大学経済学卒業後札幌で就業したが、自家の漁業形の変化によって、実家に戻って漁師になった	2023年7月 2023年11月
12	YS	男**	31	1992	神恵内	青年部長; 自営漁業; 漁師	取った海鮮物への誇りを持つ、ネット販売と発信を行う	2023年5月
13	YKS	男	30代	-	旭川	地域おこし協力隊員 5年目	5年目でも村への帰属感が薄い	2023年7月
14	FC	男	30	1991	千葉県	富士通神恵内村DX事業マネージャー	2020年から村に来て任期は2024年まで	2023年11月
15	KK	男	20代	-	神恵内	地域おこし協力隊員 2年目	村に戻って活動しながら愛着を少しずつ生まれた	2023年7月
16	MK	男	23	2000	神恵内	大学卒業	-	2023年7月

表-1について、性別に*がついているのはそれぞれ夫婦である。

また、参与観察は神恵内村祭り・松前神楽への参加と観察、女性部の仕事に参加しながら観察した。文献調査には論文、雑誌、新聞記事、神恵内村郷土資料館などが含まれている。

1-3 論文構成

本稿では第 3 章で調査地域である古宇郡地域神恵内村（カモエナイ）の概要、そして神恵内村の歴史について記述する。第 4 章では村における女性たちの生活と村の祭りにおける女性たちの様子、仕事場における女性たちについて、第 5 章では神恵内村の女性たちが持つ村への愛着の源とその先の行動について記述し、第 6 章では神恵内村の地域コミュニティの変容と、女性活動によって形成したネットワーク、または地域ブランド作りと村の発展における課題について、第 7 章で神恵内村漁村女性たちの現状と各場での役割から活動までを振り返り、神恵内村地域によって、漁村女性の役割と地域活性化における女性の可能性を考察する。

なお、引用文中の括弧は内容を補足するために筆者が書き足した部分である。また、インタビューの内容はできるだけ語り口のままにしてあるが、プライバシーや読みやすさを考慮し改変した部分もある。

2 先行研究

2-1 2000 年代以前の漁村女性に関する研究

日本における漁村女性たちに関する最初の研究は、民俗学者の瀬川清子（1995）によるもので、戦前の 1933 年から広範囲にわたって漁業女性の就業を調査し、日本における海女の全体像を初めて明らかにしたと共に、漁村女性の就業は漁業だけでなく、商業・加工業・農業・出稼ぎなどさまざまな就業を組み合わせた多就業があるという概観を明らかにした。

労働学者の岩崎繁野（1966）は、高度経済成長期における漁業技術の革新とともに、家族経営化している漁村において女性の海上作業従業者が増加していることを指摘し、漁業と家事労働の両方における負担の大きさを解明した。

それ以来、加瀬和俊（1985）は漁村女性の就業に影響を与える要因を調査し、女性就業を 4 つのタイプに類型し、女性は優先的に自営漁業に従事する限り、漁業労働の不安定な就業機会を受け入れざるを得ない漁村女性就業の特徴を示した。また、労働と家事との両立が困難だけでなく、海上作業の労働強度が高く、女性たちが「補助的・部分的・縁辺的」になってしまった。同時期に今村薫（1988）は沖縄県の石垣島を対象として、水産物流通における漁師の妻の役割を明らかにした。

また、研究背景に書いたように 1992 年に農林水産省が「2001 年に向けて、新しい農山漁村の女性」を報告し、「見えない労働」であった漁村女性の労働実態について、陸上作業を含めて把握することが課題となることを示した。

その後、女性の海上・陸上作業実態について、加瀬（1992）は、男性労働力不足のため海上作業において夫婦作業が増加した状況について考察し、その増加は地域差が認められることを指摘した。三木（1993）は海女の海上労働行動と地域における社会関係について明らかにした。宮澤（1996）は魚種によって、女性が担う陸上作業の労働過程が海上作業を規定していることを示した。児玉ほか（1999）は漁業関連の陸上作業を詳しく分けてアンケート調査を実施し、女性の漁業作業実態の解明をした。

2-2 2000 年代以後の漁村女性に関する研究

2000 年以降、男女共同参画社会基本法（平成 11 年法律第 78 号、1999 年）の公布・施行に伴い、漁業や漁村組織への女性の経営参画の視点が盛り込まれるようになった（中道 2008）。

2000 年以前は、海上作業という漁業の中心的な労働における女性の関わりに焦点を当てており、家族経営漁家における世代員の就業構造と、世代内における女性の地位変化が大きなテーマだった。しかし、中道（2008）の研究によると、2000 年からは漁業後継者不足と高齢化により、男性漁業者の単身での海上作業が進み、かつて指摘された海上作業者の女性化

は示されなくなった。そして、起業活動は女性たちの経営参加を家族経営漁家や漁協以外で実現したものとして認識され、地域の水産資源を利用した加工・販売などの形で広がっている。また、三木ほか（2003）は女性たちの起業活動をはじめ、漁村の福祉、環境保全活動などのさまざまな漁村女性活動を、漁協合併や市町村合併、水産資源の減少などの地域社会の変容とともに捉え、漁村地域と水産業の維持にたいして女性活動の可能性があることを示そうと試みた。

秋津ほか（2007）の研究によると、従来、農漁業労働や農漁村生活の過半を担いながら男性の陰に隠れていた女性の地位と役割が評価され始めた。農山漁村の女性の各活動は、具体的な経済効果や発想の新しさによって、地域農漁業に活力を与える源とさえみなされるようになってきたことが指摘された。しかしながら、中道（2008）は、今後の漁業における女性の研究においていくつかの課題があると指摘していた。その中で、1つは起業に示されるように家族経営漁家外での女性の地域水産業や地域へのかかわりがいかに地域経済、地域水産物流通の再編、漁業・漁村の多面的機能、福祉、環境保全、水産物消費に影響を与えているかについてと、もう一つは漁村社会における女性の地位や役割についての更なる解明が必要であることが指摘された。

そして、2010 年以降、漁村女性に関する研究は主に 3 つの方向に分かれている。一つ目は、三重県や東北地方におけるアマ漁業に関する研究が多い。池口（2013）は三重県和具地区を対象として、資源管理のルールを築きながら磯資源を利用してきたアマ（海女・海士）漁業における、その技術と環境認識を通して自然と付き合っている実態を明らかにした。同じく海女漁業を研究した磯本ほか（2020）は、海女漁業の存続などの実態を解明した。

二つ目は、近年の海上作業や陸上作業の漁業女性の実態を考察する研究が見られる。関（2010）は、女性の海上作業の実態と漁場後継の形態を調査する中で、夫婦操業が基本となっており、漁船漁業については隔世代間で継承することや、戦後の漁業不振と機械化、夫の安全性が女性の海上作業のきっかけになることを示した。副島（2010）も、女性の海上作業従事への進展と漁家家族の有り様や後継者の有無が深くかかわっていることを沿岸漁船漁業の夫婦操業の状況と特徴として明らかにした。また、荒（2011）は漁村女性の経済的な役割を考察し、半農半漁で生計を立てていた地域では半農（花卉栽培）自体の衰退と漁船、漁具の動力化を通じて女性でも漁獲ができるようになることを契機として、それまで畑作中心としていた女性が漁船へと乗り込み、漁業へ従事していくという流れが見受けられた。副島（2015）は、漁家女性を中心として、陸上作業が外国人労働の参入により生産規模の拡大が進行している状況を考察し、地域全体として水産業を見通していく場合、海上作業側ばかりを見るのではなく、陸上作業も含めて検討していかなければならないことを明らかにした。

第三に、漁協女性部や漁村女性により起業グループを中心にさまざまな方面に考察した内容が多い。小泉（2013）は女性活動と地域水産振興施策との関連に注目し、女性の活動力の顕在化と、今後の漁村振興事業や地域づくりにおいては、合議の場での女性の意見の取り込みを保証することが重要であることを明示した。同じく、藤田（2015）は漁協女性部

による持続可能な地域活性化に関する研究の中で、地域活性化の原動力ともなる女性部の存続には、組織・運営体制基盤の確立が求められることと、今後の発展のため、地域住民や他の組織を巻き込み、漁協も含めてどのように協働していくかという課題があることを明らかにした。

飯島（2018）は意思決定過程への参画といった男女共同参画の推進のために必要な視点に着目しつつ、漁業分野の現状と課題を把握し、漁村女性たちが、漁村における意思決定過程にはほとんど参加していないことと、漁協における正式組合員の女性が少ないということが大きな原因だと解明した。また、副島（2020）は漁村における女性グループ活動を中心に考察し、高齢化、活動は停滞し、解散することが漁村女性グループ活動の課題を明らかにし、女性が地域をともに考える者として、対等に、一緒に考えていけるような土壌がつくられれば、地域を支える活動がまた新しい形で展開できることを示した。小川（2021）は、女性部の取り組みを振り返りながら、女性の持つ「気づく力」と「つなぐ力」を明らかにした。また、「コロナ後の社会の再建」における地域で分断が起きるなか、今こそ女性の力が必要だと指摘した。

しかしながら、地域活性化や漁村地域全体から考察する研究は多くなく、女性個人のライフヒストリーを注目し考察する文献も少ないとみられる。その中では、北海道における漁村女性たちの生活や仕事の現状を考察する研究がさらに少ない。そこで、本稿の目的をもう一度確認する。以上の研究背景と先行研究より、本研究では今まであまり調査されてこなかった漁村地域である北海道古宇郡地域神恵内村を対象として、漁村女性の暮らしを紹介していくことで、（1）漁村で暮らしている女性たち生活と作業の実態を明らかにすることによって、生活、経済、地域社会における女性たちの役割を明らかにすること、（2）女性たちの様々な活動によって形成されたネットワークを考察し、漁村活性化における彼女たちが持っている「力」と可能性を検討することの2つを目的とする。

3 調査地域の概要

3-1 古宇郡地域神恵内村（カモエナイ）とは

古宇郡地域は、図-1（右）に示されているように、北海道の左側の積丹半島西側に位置し、札幌から西に 108 km の位置に存在する。札幌から普通自動車で 2 時間ほどで着く距離にある。古宇郡地域は 泊村（人口 1,477 人）と神恵内村の 2 村から構成された地区である。

北海道で一番小さな漁村を有している神恵内村は、地域の規模は泊村より大きく総面積は 147.80 ㎢あるが、2023 年 10 月 31 日現在の総人口は 762 人¹である。そのうち、男性が 382 人、女性が 398 人、外国人が 1 人いる。男性人口率が 48.9% で、女性人口率が 51.1% である。高齢化率が 51.49%²（後志総合振興局の 2020 年データ）となっており、北海道内 4 位の高さである。

神恵内村では現在保育園 1 校、小学校 1 校、中学校 1 校があり、高校はないため神恵内村の子供たちは岩内町の高校に進学することが多い。漁業の不振などにより、村の過疎化が進み、子供の人数も昔と比べると大分減少した。2022 年までは 20 歳～39 歳の女性人口（出産や子育て世代）が 29 人で、総人口の 3.6% であり、出生数は 4 人³を記録していたが、2023 年現時点（11 月）まではいよいよ 0 人⁴になった。

昔はニシン漁業が繁栄だったが、1955 年頃からニシンはほとんど姿を消した（後で詳しく紹介する）。漁業の他に、現在の神恵内村では釣りやキャンプ場など観光業が盛んであり、そのうち夏が観光の繁忙期、そのほかの季節は閑散期である。交通として、大部分の人は自動車で、村までのバスは 1 日 2 回しかないほど少なく、そのバスも 24 年に停止予定である。

このように、神恵内村は現在、漁業の不振に伴って経済の衰退、労働力の流失、人口の減少、過疎化と少子高齢化に関する問題が深刻に進行している地域である。

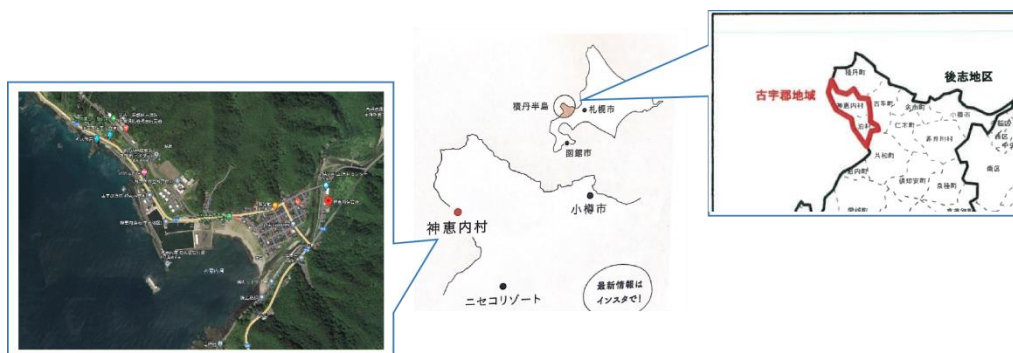


図-1（左）神恵内村の地図（Google Maps）図-1（右）古宇郡地域神恵内村の地図

¹ 神恵内村ホームページ：(<https://www.vill.kamoenai.hokkaido.jp/>最終閲覧日 2023 年 11 月 21 日) より。

² 後志総合振興局神恵内村(北海道):<https://graphtochart.com/japan/kamoenai-mura-percentage-distribution-of-total-population-65-and-over.php>

³ GD Freak 神恵内村の人口と世帯：<https://jp.gdfreak.com/public/detail/jp010050000001001404/18>

⁴ 聞き取り調査で女性部部长 MY さんより

3-2 神恵内村の歴史

上に書いたように、神恵内村の昔の産業は漁業が基幹であり、特にニシン漁業が盛んだった。神恵内村の漁業を紹介する前に、神恵内村の場所と昔の歴史を紹介したい。

神恵内という名前の語源はアイヌ語の「カムイ(神)・ナイ(沢)」であり、アイヌの人たちは地形がけわしくて人が近寄りがたいところ、「美しい神秘の沢」と名付けたとおり自然は神秘的であり、積丹半島を周遊する道路が開通して、特に「西の河原」を中心とした海岸は「神が宿るところ」にふさわしい景観である。村の産業は漁業が基幹で、明治、大正時代には鯿の千石場所として栄えたが、昭和 20 年代後半に鯿の姿は消えた。その後、神恵内村は養殖や他の魚種などの新しい漁業を求めてたゆまぬ努力をつづけ、海で生きる村づくりをめざしている。

神恵内村郷土資料館⁵（以下郷土資料館に省略）の記録によると、神恵内村は、北海道が「蝦夷地」と呼ばれて松前藩が支配していた宝暦元年(1751)に古宇（フルウ）場所として歴史の扉が開かれた。

神恵内村の始まりとしては、今から、300 年前、古宇（フルウ）と呼ばれ、アイヌだけの静かな生活が営まれていた。この頃、松前藩が成立し各地にアイヌと交易を行う「場所」を開いてきた。古宇場所の請負人は近江商人・岡田弥三右衛門で、場所請負が始まったのは 1751 年(宝暦元年)のことだ。この時から古宇の開発が始まった。神恵内(カモエナイ)は江戸幕府が西蝦夷地を直接支配した 1807 年から和人が住むようになり、寒村が開けていった⁶。

1821 年頃、松前藩が再度地域を支配下に置いた際には、場所請負人の台頭により古宇場所は急速に発達した。新しい漁法を導入して大量漁獲を実現し、漁獲物の加工法を考え、輸送のために船を建造し、販路を拡張するなど場所の経営は組織的かつ合理的に行われた。そのため場所請負人は巨万の富を得て、財力によって松前藩から、特権待遇をうけるようになったが、こうした繁栄の影で漁業に使役されるアイヌは、酷使され衰去を早めていった。

その間の一時期は、幕府自ら蝦夷地を支配しアイヌを保護しようとしたが、松前藩の復領と財政難から請負制度が復活し、酷使の体制はより一層徹底したものになり、減少したアイヌに変わって、和人の出稼ぎ漁民が増加するようになった。その出稼ぎ漁民も末期には利益を搾取され、場所請負人は、明治になるまで繁栄をつづけた⁷。

神恵内村では明治になって人口が増加し、商店、旅館、料理店、理髪店、浴場などが軒をつらね、1872 年戸長がおかれると病院、学校、郵便局など公共の施設が次々と設置され街並が整っていった。こうした発展には漁場経営者である「親方」たちの惜しげない私財の提供が数多くあった。1900 年旧市街を一なめにする大火が起こったが、人々がお互いに協力し譲りあって新しい村づくりに努力し現在の市街地の基盤をつくったと郷土資料館に記録

⁵ 神恵内村郷土資料館展示内容より。

⁶ 神恵内村郷土資料館展示内容より。

⁷ 神恵内村郷土資料館展示内容より。

された。

神恵内村の漁業の歴史を語る上で、かつて北海道で大繁盛したニシン漁を見過ごすことはできないだろう。

小林（2002）の北海道ニシンに関する研究によると、北海道ではニシンを生業として漁獲するようになったのは15世紀になってからで、18世紀後半から全盛時代を迎えて、漁民が増え、漁網が改良されるにしたがって1897年歴史最高の97万トン余を記録され、開拓初期の北海道の経済に大きな影響を与えた。1940年以降からニシン資源変動が大きくなり、豊漁一不漁を繰り返しながらも漁獲は減少して、1955年頃には繁栄を誇った北海道沿岸からニシンはほとんど姿を消した。

さらに、神恵内村郷土資料館の記録によれば、神恵内では1914年に泊と合わせて10万石⁸の漁獲があり、これは全道の最高記録だった。漁獲されたニシンは長い間、本州地方の水田や畑の肥料として使われた。大正になってからは身欠ニシン、数の子等、食料として利用されることが多くなった。

神恵内の海はプランクトンの量・潮の流れなどの好条件などにより豊富な漁獲量を誇る漁村として古くから栄えた。しかし、かつて盛況だったニシンの漁獲量が激減したことなどにより、村の漁業を取り巻く環境は厳しさを増してきたことから、今までの「獲る漁業」から、ウニ・ホタテ・サケ・マス等の養殖を中心とした「育てる漁業」への転換に以前から力をそそいできた。

このように、神恵内村での漁業は大正からニシン漁は不安定となり、浜の景気は悪くなる一方で、浜をはなれる人が増加した。その後、神恵内は苦難の時代を耐えながら戦後、新しい形の漁業と共に新しい村政が誕生し、新しい村づくりが始められた。

⁸ 1石=1095合 1合=0.156kg

4 漁村で暮らしている女性たち―漁家の娘、嫁、女性漁師・移住女性

4-1 漁村女性たちの生活

4-1-1 変化に伴う多様な生活

漁業の海上作業の仕事は地域によって、夫婦作業、海女漁業や男性だけの形態が存在する。神恵内村では昔から女性たちが陸上作業で重要な役割を担っている。仕事場以外の生活の場では、女性たちの話が中心になることが多い。男性が仕事を中心としたライフステージを歩むのに対し、女性たちのライフステージは異なり、特に結婚や子育てが大きな転換点となる。女性として生きるのは、人生の中ではさまざまな段階があり、その中では、「結婚」や「子育て」などが自分のやりたいことや女性たち自身の生活を変え、中断させた可能性もある。本節では「結婚」と「子育て」における女性たちの実態について書く。

55歳のMYさんは、神恵内村に生まれ育って、中学校までは神恵内村で過ごし、高校は岩内高校へ通った。高校卒業後は岩内の銀行に5年間勤めていた。1993年（25歳の時）札幌大学から卒業した夫と結婚してから、仕事辞めて札幌に引っ越し、札幌で2年間を過ごした。夫の実家も神恵内の漁師で、その時は漁業の出荷形態の変化と共に、実家の漁業担い手不足を感じて、神恵内に戻って漁師になった。その時（27歳の時）は夫と一緒に村へ帰って、浜の仕事を5年間した。今は自営漁業の仕事と神恵内漁協女性部の部長を務めている。

女性たちは結婚することによって、自分の「これから」の生活が変化するきっかけになる。その中には結婚によって地域に引っ越し「移住者」となる女性や、夫の仕事関係で移住する女性たちがいる。

39歳のYHさんは、札幌に生まれ育ち、高校卒業後は漫画専門学校に進学した。結婚して札幌に子供が1人いて、札幌で3人暮らしをしていた。5、6年前に夫が転職するため神恵内村に移住して来て、下の子が生まれた。ずっと札幌にいて、神恵内村に移住した感想について、YHさんは、こう語った。

札幌では人との関わりが希薄で、会った人におはようとか挨拶もないし、札幌にいる時は、人との付き合いも本当に個人と個人でって感じだったのだけど、こっちに来たら基本的にみんな知っている人だから、どこ行っても何か「こんにちは」みたいな触れ合う機会が多くてそこにまず感動した。子供の行事、運動会とか発表会とかも、村の人も来てもいいよみたいに、地域ぐるみの子育ての感じで、村長さんも、子供は宝だっというふうに、あったら挨拶とか頭を撫で、一緒に話をする感じだ。子供にとって、（神恵内村が）すごくいいところだなんてずっと思っていた⁹。

⁹ 2023年11月10日YHさんの聞き取りより。

同じく移住者である YM さん（31 歳）は、共和町にある実家は農業を営んでいて、小学 3 年生の時からずっと農家の手伝いをやっていた。以前は共和町で介護の仕事をやっていたが、結婚して 2 人目の子供（3 人の子供がいる）ができたタイミングで介護の仕事を辞めて、神恵内村に移住して夫の漁業の仕事を手伝いながら育児をしていた。今は夫と一緒に自営漁業を経営して、インターネット通販サイトの SNS で宣伝と加工品を作って売る仕事を行っている。

また、子供を産む前の女性たちは漁業や仕事に力を入れて、浜で働いていることがよくある。それに対して、子供を産んだ後、つまり子育ての時期には漁師をしている夫が海業に出ている間、女性たちは家庭を守っていた。子育てしながら働いていた場合もあった。

46 歳の YK さんは、以前は北海道銀行で働いていたが、村の過疎化の深刻さを感じたため、村の活性化に力を入れたい思いから、夫と共に村で民泊を経営し始めた。2001 年に結婚した夫とは小学校、中学校が同じ知りで、子供は高校生と小学生の女の子 2 人がいる。上の子は 2006 年に、下の子は 2013 年に生まれた。子育ての時期は子育てをしながら仕事も行っていたため非常に大変だったが、YK さんはずっと「村の活性化」という本当のやりたいことへの熱意が心の中に存在している。それら「やりたいこと」はコロナの 3 年間で把握し、いろいろな商品開発や SNS では発信など事業を取り込みできた。

当時の子育てをしながら仕事をする様子と辛さについて YK さんはこう語っている。

上の子のときは、4 時とかに起きて、あと朝は子供を抱っこしながら、（民泊の）準備をしたりとかした。ほとんど毎日抱っこしていた。昼ご飯の準備をして、食べた後少し寝ますね。そのときに今度、子供は寝ないとかもあった。あと風呂入れてあげたりとかするのも結局全部だから。小さいときは夜中もう起きるし、こっちは疲れて眠たいのに、夜中も起きる（笑）。それが 2006 年から 2015 年、ずっと子育てしながら仕事行っていて結構大変だ。朝は抱っこだし、でももう 3 歳までって決めた。体重が 15 キロになるまでって決めた（重たくて）¹⁰。

同じく、子育ての一日の時間について、移住者の 39 歳の YH さんはこう述べている。

朝 2 時半くらいに起きて、恋愛チャットゲームアプリの運営とか企画とか、そのイラスト、ユーザーの返信（チャット）に対して私が返すっていう仕事もしていて、シフト制で 3 時から 7 時まで毎日やった。その後、子供が家にいて、学校に行けたり行けなかったりするから、その時間で働いていて、日中はそのまま家のことをやった。子供が学校に行けたらイラストの仕事をする。そして子供が下の子が 4 時に帰ってくるね。それから家のことをやって 9 時に子供と寝る¹¹。

¹⁰2023 年 11 月 8 日 YK さんの聞き取りより。

¹¹ 2023 年 11 月 10 日 YH さんの聞き取りより。

また、55歳のMYさんは、27歳の時に夫と一緒に村に帰って直接浜の仕事を5年間した。32歳で子供を産み、5年くらい仕事を休んで子育てに専念した。その後、もう一度仕事に戻った。

当時の子育てについてMYさんはこう語っている。

もう早起きして、ご飯を食べてからの午前中は、家のことを投げて子供と一緒に遊んでいた。その後は犬を引っ張りながら2人を散歩させて、昼前ぐらいに疲れ果てて帰ってくる。そしてご飯を食べさせたらお昼寝させる。(私は)一緒に寝るのは時間が勿体ないと思って寝ない。起きられないのよね。夜にも夜泣きしない兄ちゃん(上の子)は本当に楽だった。わがまま言わないし。下の子もすごい夜泣きして寝ないとかってそういうのもなかった。歳になったら保育所に入れちゃって、仕事して、帰ってきたら家のことをやってね。ご飯を食べさせて、迎えに行って、今度帰ってきたらまたバタバタだから、そんな感じだった¹²。

子育て前後の変化について、以上の3名の女性とも、以前は自分のペースで仕事や生活もしていたが、子供ができた後は子供が中心になった。。多くの女性たちは子供を産んだあと、「自分」という役割から「母」という役割に転換し、女性の生活世界も「自分中心」から「子供中心」になった。しかし、「子供中心」というのも子育ての時期に限られ、特に最初の3年間は辛くなるが、そこを乗り越えたら、また次の段階がやってくる。家庭ももちろん人生の中で非常に重要だが、女性たちがもう一度「自分」と「やりたいこと」という点で、その「チャンス」が待っている。

結婚していない女性もいる。53歳のNYさんは、神恵内村出身で、父、祖父が泊村の漁師、母は神恵内村出身である。10歳のときに父が病気で亡くなった後、母と共に神恵内村に引っ越した。兄が1人いて、高校を卒業して本州に行き、今は結婚して千葉県に移住した。こうした状況から、NYさんが母の面倒を見ている。

小学校と中学校は神恵内村で、岩内の高校から卒業した後は岩内町のバスターミナルの事務を8年勤め、26歳から古宇郡漁協に転職した。NYさんは結婚に対する考えを次のように語る。

昔は結婚に対しての思いが湧いていた時期もあったが、今はその時期を過ぎた感じがする。今は自分もすごく楽で慣れてきたし、結婚するのは反対していないが、最終的にはパートナーでいいという感じだ。一緒にどこかへ行くとか、何かをやるとかは、男の人より女友達の方が楽しいでしょう¹³。

¹² 2023年11月7日MYさんの聞き取りより。

¹³ 2023年11月9日NYさんの聞き取りより。

普段の生活について、NYさんは、次のように語っている。

土日は女性部の仕事が忙しかったりとかするのだけれど、それがなかったら（ない日は）、月に2回か2ヶ月に1回は札幌に行ったりとか、友達に会ったりとかしている。5年前から月に1回小樽のパン教室に通い、今も自分の家でパンを作ることもしている。30歳まではバレーボールをやっていて、高校時代は結構きつい部活動だった。社会人チームが地元にあって、週に3回に練習して、全道大会とかにも参加した。今はやっていないが¹⁴。

このように、女性たちは、生活の場で中心になることが多く、また、ライフステージも男性のものと異なり、結婚や子育てが大きな転換点となる。MYさんは、村から出て就業して、結婚することによって仕事を辞め、その後は夫の仕事変化とともに、生活と仕事も変わった。特にやりたいことはなかったが、昔勤めていた銀行での仕事は向いてない気がしていた。今の仕事や生活は楽しくて幸せと感じているようだ。現在、漁協の女性部の部長として一番やりたいことは、女性部をより良くすることである。MYさんの話からは、女性として、生活や人生の変化に対しての柔軟性を感じた。移住者のYMさんも、子育てのため移住し、生活の環境が変わったが、自分の生活や、村の今後のためにも、時代に応じて新たなことをやり始めた。

また、同じく移住者のYHさんは、「都会」から「村」に移動することで、人との繋がり、都会より暖かい人間関係を体験し、再認識し、感動した。これも、女性たちの生活での体験はライフサイクルやライフスタイルに応じて常に再編されている。YKさんは故郷のため地域活性化に力を入れたいが、子育てや自分の仕事のため一度は諦めた。しかし、YKさんはずっと「自分のやりたいこと」を目標とし、それを実現できる機会を待っていた。

女性の生活は多様で、人生の色々な段階とそれに伴う変化がある。女性として生きるとは、人生の中で、結婚、生産、子育て、仕事などの色々な段階がある。子育ては女性のライフステージを変化させる大きなきっかけでもある。女性たちは、家族や暮らしを豊かにするという意思を優先する。だが、心の中に自分のやりたいことをそれぞれもっており、それを実現することができる時期やチャンスのんびりと待っているのである。その中で、神恵内村の女性は「女性こそが楽しめるステージ」という思いと、自分の本当にやりたいことを、信念を持ちながら、いつでも始められる。そのような考え方は、非常に前向きであり、生活の中での瑣末なことに惑わされることなく、人生や本当にやりたいことへの情熱を失うことはない。そのような柔軟な対応のできる漁村の女性たちの力や独立の姿勢が、村の生活の基盤を支えているのだと思う。

¹⁴ 2023年11月9日 NYさんの聞き取りより。

4-1-2 村の祭りにおける女性たち

多様な生活面以外にも、神恵内村の女性たちは地域社会のいろいろな伝統的な活動において活躍している。本節では神恵内村の女性たちが村全体の祭りの中ではどのような役割を担っているのかについて書く。

神恵内村には、北海道無形文化財に指定されている松前神楽がある。郷土資料館の記録によると、神恵内村の川白神楽は、南部神楽と松前神楽を合わせた形で伝承されている。

今から 500 年前、北海道がまだ蝦夷地と呼ばれていた頃、松前付近で何度も和人とアイヌが戦をした。松前藩では、その戦に勝つことを祈って、神社で神楽を行った。能や、他の神楽、芸能なども取り入れながら、しだいに松前神楽をつくりあげた。この神楽は神恵内村川白でニシン漁が盛んな頃に伝わった。川白神楽は太鼓(大太鼓・小太鼓)、手調子(鉄の小さい円盤を 2 個あわせたもの)、笛(雅楽につかう竜笛)の三拍子と呼ぶ楽器と歌(神楽)で構成されている。松前神楽は 15 種類からできているが、川白のものはそのうち 7 種類が伝承されている。また、神恵内村では中学生を中心に 10 種類の松前神楽が伝承され、春祭、例大祭、秋祭などで見ることができる。

神恵内村の最大の祭りは、7 月に行われる沖揚げ祭で、夏のイベントとして定着しており、多くの観光客が訪れる。沖揚げ音頭や松前神楽、小学生によるソーラン演舞など、プログラムが盛りだくさんだが、ここで紹介したいのはもう一つの祭り―神恵内厳島神社祭典のことである。筆者が行った神恵内厳島神社祭典への参与観察から祭りの実態と女性たちの役割を整理する。

神恵内厳島神社の例大祭は毎年夏の 7 月 14 日～7 月 16 日の日付に執り行われる。祭り期間中は、7 月 14 日の神社での宵宮祭から始まり、7 月 15 日の神輿渡御、7 月 16 日に再度神社での本祭が行われる。次は具体的に神恵内厳島神社例大祭の中での女性たちの姿と役割を紹介したい。

7 月 14 日の宵宮祭では、厳島神社で神楽が披露される。出演者の主は伝統文化を継承する村の子供たちである。特に、女の子の出演者は約 10 人おり、成人女性が笛を演奏する役を務めていった。7 月 15 日は、厳島神社を出発したお神輿が村内を巡り、村は活気づく。当日は朝に船の上に神輿を乗せて海上をまわる「海上渡御」(図-2)をして、その後一日中村を歩き回る。途中、休憩点をいくつか設定して、御輿を担う人たちにお酒と食べ物を提供する。午後 4～5 時ぐらいの時にまた神輿が海に入っていく「海中渡御」をして、その後は再び休憩点をめぐって歩き回る。最後には神輿を担いで神社の境内まで駆け上がる「火渡り」を行う。祭りの列隊にはおよそ 100 人がいるが、その人数は固定されておらず、毎年異なる。祭りの列隊における頭は、小学生ぐらいの子供たちが務める。その後ろは、中学生が演奏し、巫女さんと青年から年配の方までがさまざまな旗を掲げて続く。一番後ろには御輿を担ぐ 16 人ほどの成人男性がいて、漁協理事の MS が指揮官を務めていた。とにかく村が賑わいを見せる。7 月 16 日に再度行われる神社での本祭では、宵宮祭と同じく神社で神楽を

行う。とはいえ、本祭における出演者は子供たちではなく、成人の人々による「本番」としての神楽である。



図-2 神恵内厳島神社の例大祭「海上渡御」

(2023 年 7 月 15 日 FC さんの撮影より)

神恵内厳島神社例大祭の中での女性たちの役割はどうか。子供は参加者や演奏者、隊列にも参加している。特に、神楽に参加することは、子供にとっては村の歴史文化を理解し、継承していく良いきっかけでもある。

神恵内村川白神楽への参加に関して、MA さんはこう語っている。

神楽は小学校 5 年生から始めた。兄ちゃん(MK さん)が先に神楽を始めて、かっこいいなと思ってやりたくて。友達と一緒に神楽を始めて(始めたけど)、やっぱり難しい。中学生になった時、舞を、上手に踊れるコツみたいなのを自分の中で見つけて、それをきっかけに、神楽が楽しくなって、お祭りにもいっぱい参加したいと思えるようになったし、いろんなところで自分の舞を見てもらって誰かに上手になったねとか言ってもらえることで、今まで頑張ってきた達成感とかが得られる。何よりその村の伝統的なものっていうものだから、それを継承していきたいが、村の子供たちはどんどん少なくなって、継承していくともそれよりさらに少ない¹⁵。

また、青年女性や成人女性は隊列にも参加しているが、多くの役割は各世代の参加男性や各休憩点の事前準備と事後の片付けや、御輿を担う人たち(男性たち)の面倒を見ることがある。宵宮祭の前から、夫の服と道具を準備したり、当日(7 月 15 日)の朝からお弁当とご飯の用意御輿を担う人たちの食べ物と飲み物を準備したりして、各休憩点に行って向か

¹⁵ 2023 年 7 月 15 日 MA さんの聞き取りより。

える。休憩点は、二か所の村の公共施設を除いて、村民の家の前に設定された。隊列の人たちは休憩点で休憩する。女性たちは、隊列におけるそれぞれの役割の人たちに休憩スペースを用意し、滞在時間におもてなし隊列の人たちが必要なものを用意する。そして、休憩が終了後は早めに片付けたりすることも、女性たちの役割でもある¹⁶。

御輿を担う人たちには、担う御輿ごとに酒が出され、その酒を飲むように勧められていた。それによって御輿を担う男たちは昼から酔っぱらって夜まで飲んでしまい、夜はもう何を話しているのかわからない人が多い。最後の「火渡り」終わると、各家庭の女性たちは酔っぱらった男たちを家に迎え、風呂に入れて寝かしつける必要がある¹⁷。

このように、祭り全体の中にも、若い女性から中年女性まで、女性たちが多く参加している部分があるといえる。村の祭りと神楽への参加が、村の女性にとっては村の歴史文化への参加となり、その中では忙しく大変な側面もあるものの、それ以上に自分の役割とやりがいを感じられることだろう。多くの女性は祭りを楽しみながら祭りを後ろで支えていて、女性にとっての地域への愛着に対して大きな影響を与えているように思われる。

4-2 漁村女性たちの労働

4-2-1 浜の女性たちの仕事

浜という特殊な環境において、女性たちはどのように働いているのでだろうか。まず、浜での仕事にはどのようなものがあるのか紹介したい。

特に沿岸漁業においては、陸上作業を担う女性たちの存在があってこそ、海上作業の継続が可能となっているという漁業種も少なくない。また、水揚げ量の増大が見込まれない昨今では、漁業経営や地域において、細やかな選別作業や販売方法の改善などの陸上作業のありようが、ますます重要になってきている（副島ほか 2020）。

神恵内村で浜の女性たちの仕事は、海上作業に出かける夫たちのための弁当作り、陸揚げの手伝い、カゴや漁具の洗浄作業といった、漁労を行う男性をサポートする仕事から、陸揚げされた水産物の選別、運搬、加工、販売といった流通にかかわる仕事など多岐にわたる。海上作業に出かける夫たちのための弁当作りに関して、MYさんはこう語っている。

明日の仕事でお弁当必要だよって言われたら、お弁当 6 人分のお弁当を朝の 3 時か 4 時ぐらいに起きて作ったりとかはする。気にしていたら今すぐ必要とかって言われたときはもうバタバタで、できませんって言ったら怒られるから何とかしなければ。コンビニあればね、お弁当買っていけるけど、コンビニ行って帰ってくるの 30 分以上かかるから無理だから、、、

¹⁶ 筆者が 2023 年 7 月に行った神恵内厳島神社祭典への参与観察より。

¹⁷ 筆者が 2023 年 7 月に行った神恵内厳島神社祭典への参与観察より。

お弁当って言ってもね、箸で上品に食べるような弁当じゃなくて、おにぎりと同じくらいと食べられるような、ちょっとつまんで食べるようなものしかいないっていう。1人1人のお弁当じゃなくて、ドーンと二つくらいに分けて、つまんで食べるようなお弁当。水分がなくなるようなものは駄目だし、茹で卵とかだったら、水欲しく水分欲しくなるなど冷たくしちゃうから、卵は却下されたと、なんか菌に詰まるようなものも駄目とかさ。だからいつも決まったようなもの、それを順繰りしているとか¹⁸。

陸揚げされた水産物の選別、運搬、加工までについて、神恵内村の状況を説明してみよう。女性たちは朝家のことと子供の面倒が終わったら、浜に行って陸揚げされたものを待つ。その後、陸揚げされたら、まずは選別と運搬（図-3）。朝の浜は寒いけれども、女性たちは喋りながら仕事をする。その後、カゴや漁具の洗浄作業は男性と共に行い、各自営漁業の水産物を自分のところに運搬し、更に次の選別と加工をする。

一日の時間と仕事について、MYさんはこう語っている。

仕事があれば朝4時半とか5時に起きて、忙しいときはもっと早く起きて、家のことをしたり、溜まっている女性部の仕事あったらやったりとかしながら、船来たら出荷の、魚の選別から始まって、魚を秤にかけて箱に入れて。そういう作業を2時間くらいして、9時から12時ぐらいまでの仕事の後始末とかしたら大体9時から10時くらい。

帰ってきて、自分で持って帰ってきた魚を作らなきゃないでしょう。女性部の仕事。魚持ってきたら女性部、今日やりますよって言って、午後からはそれでバタバタって感じ。あとご飯食べてね、ご飯作って寝るだけの感じだ¹⁹。

¹⁸ 2023年11月7日MYさんの聞き取りより。

¹⁹ 2023年11月7日MYさんの聞き取りより。



図-3 水産物の選別

(2023 年 5 月 13 日筆者撮影)

たいへんな重労働にも見えるが、彼女たちはいつも元気と活力を持って、浜の仕事を喜んでやっている。それについて、EC さんはこう語っている。

浜の皆もいるし女性部の仲間たちがいるから、それなりにみんながあれしてくれるし、皆が頼りになるし、楽しいし、何かあれば手伝ってくれるし助けてくれる。やっぱり浜に行って、皆と話しながらするのは楽しい。ずっと黙って家にいるよりは、外で働いて、皆がいるのは楽しいでしょう²⁰。

同じく、難病で体が少し不自由な IM さんも、こう語った。

皆が私の状況が分かっているから、自分のできることをやりなさいっていう感じで、無理なことも言わないし。みんなでやっている作業が私できなくても、「じゃ、IM さんはこれやれ」っていう作業を与えてくれるから、すごく助かっている²¹。

このように、女性たちは生活面で大きな役割を果たしながら、浜の仕事にも重要な存在としている。「漁業は男性の仕事」という社会的イメージの裏では、女性たちの浜における仕事こそが、地域漁業を支えているだけでなく、地域の小さなコミュニティに対しても役割を果たしている。

²⁰ 2023 年 7 月 16 日 EC さんの聞き取りより。

²¹ 2023 年 11 月 8 日 IM さんの聞き取りより。

4-2-2 神恵内村漁協女性部と女性部の活動

漁村女性たちは自営漁業やさまざまな地域経済活動を行っている。一方で、多くの漁村地域では、漁村女性に関わる組織としての漁協女性部がある。漁協女性部はどのような組織なのか、漁村の中ではどのような役割を果たしているのか、神恵内村の漁村女性部はどのようなことをしているのか。まずは、漁協女性部の始まりを紹介したい。

2020 年に刊行された全国漁協女性部連絡協議会 60 周年を記念する『漁村女性のこれまで、そしてこれから』（副島ほか 2020）によれば、漁協女性部の始まりは 1951 年の北海道の積丹半島にある泊村の盃（さかずき）漁協の取り組みだ。背景としては、神恵内村の歴史の節で紹介したように、1940 年以降から、今まで大漁にとれていたニシンがパタッととれなくなってしまい、イカも不漁続きになってしまったことがあった。

盃漁協地区の漁民たちの家計状況は、このままでは正月も迎えることができないと人びとが心配するほどだった。そこで、組合長が信漁連にお金を借りにいったところ、「貯金があればお金は貸せない。1 日 1 円でもいいから貯金してください」と言われてしまった。その後、組合長は家事を担う女性たちと何度も相談した結果、盃漁協地区の女性たちが立ち上がった。盃漁協婦人貯蓄実行組合を組織して、「1 日 10 円、1 か月 300 円」を目標に貯金推進活動を開始した。この動きが長崎県にも伝わったあと、長崎県をはじめ、各都道府県で次々に漁協女性部が誕生した。1951 年に北海道の盃漁協から始まった漁協女性部は、8 年後の 1959 年 3 月時点で 1,065 部、部員数が約 19 万 600 人にも増加した。

このように、漁協女性部の初期の活動は、このように貯蓄推進活動を柱にして展開し、漁協信用力の強化に深く関係してきた。現在漁協女性部の活動は貯蓄活動以外に、海難遺児を励ます運動、石けん使用推進運動、魚食普及活動、環境保全活動、海浜清掃活動などにも取り込んでいる。

そういう背景から、神恵内村の漁協女性部は 1961 年に設立され、2009 年には泊、盃、神恵内の 3 漁協が合併し、古宇郡地区漁協組合が発足した。1992 の神恵内村の漁師は 100 人以上にいたが、この 30 年で（1992 から現在まで）一気に後継者がいなくなり、今の漁師は村民の 10% しかいなくなった²²。同じく、神恵内村漁協女性部の部員もこの 30 年に少なくなってきた、30 年前の女性部は 50 人～60 人がいたのに対して、現在の女性部部員人数は 30 年前の 5 分の 1 くらい、11 人しかいなくなった。

また、神恵内村漁協女性部の活動も、昔と比べると大きな変化があったと言える。昔の神恵内村漁協女性部は活動が少なく、植樹や掃除、北海道道内の漁協女性部大会や小樽地区での大会に参加することがあったが、これ以外部員たちが集まる機会も少なかった。

今の神恵内村漁協女性部のメインの活動は加工品事業、新商品開発とその販売活動がある。他には小学校に給食の魚を提供している「ふるさと給食」、漁協青年部と一緒に小学校で行う調理授業、さらに、神恵内村のイベントにも出店するなどの活動もある。

²² 2023 年 2 月 9 日 MY さんの聞き取りより。

その中では特に加工品事業と新商品開発は、現在の神恵内漁協女性部によって重要な活動となっている。この神恵内村女性部の商品開発について、その経緯を詳しく説明しよう。

最初の加工品事業を始めたのは、前部長の EC さんが任期の時から始めたことであり、主には神恵内のイベントで売るために作っていた。主には、冷蔵の真空のお魚やホッケ開きと、常温の鮭フレークの缶詰があった。これまではずっと、少量（30－40 個ぐらい）かつ単発で販売して来たが、近年はコロナの原因で村のイベントが中止になり、売れきれなくなった商品は神恵内村の「道の駅」での販売を開始した。その後、村からふるさと納税の返礼品に使用したいと依頼を受けて、様々な組織と連携し、新商品の様々なアイディアをもらい、1 年以上の時間をかけて、新商品開発が完成した。新商品は「鮭フレーク」「桜鱈」「ルーローハン」という「和、洋、中」の考え方を含めた 3 セットの常温商品である（図 4）。



図 4 女性部新商品

（北海道信漁連営業推進部柳橋様より）

具体的にどのような仕事が女性部の加工事業で行われているのか、使用されている材料はどこから来ているのか、ここで整理しておこう。

現在女性部加工品の素材は、村の漁師が獲った魚やホタテを中心に、他には漁獲の後選別する時に大きさや重さが標準にたどっていない海鮮物も使っている。漁師たちが獲った品質が良い魚介類を使っているため、商品としての質は非常に高い。加工品の種類は魚の種類によって年中異なり、女性部長が女性部の LINE グループで翌日の作業内容を事前にメンバーに伝え、手の空いている人が手伝いに来る。時には女性部部員以外の村の女性が手伝いに来てくれることもある。

村としては積極的に女性部の商品開発・販売事業に協力している。もともと女性部の商品を作るは、漁協の乾燥機と真空機を借りるために神恵内漁協の加工場まで車で行く必要があったが、村から女性部専用の乾燥機と真空機が提供された。その結果、今では水産物の取り扱いから最終製品の真空バッグに至るまで、加工事業のすべてを女性部が行っている。これにより、水産物の工場への運搬にかかる時間と労力が大幅に削減され、女性部の加工事業の効率化が図られた。

女性部の部員は全員の仕事が漁業のため、朝に浜での作業が終わると、女性部で使う魚介

類の一部が女性部の加工場に運ばれる。女性部の加工施設は、村から女性部にも提供された元保育所の施設を利用している。その後、女性部の加工施設で女性部のメンバーが食材を加工し、調理・加工する。また、神恵内漁協女性部は商品へのこだわりも非常に高く、冷凍するものを使わないということだ。部長としての MYさんは、こう語った。

一度冷凍された魚を処理するなんて、やったことがない。美味しさを保証できないからです。お客様が最初に解凍する人だ²³。

だから、女性部の全員が最初に魚介類を調理し、処理している。

こうした女性部の加工事業に対して、20年以上に女性部の事務を務めている NYさんは、こう語った。

昔は加工しなくても魚が売れだし、でも今はただ取ってきたものをただ箱に詰めて売のような時代じゃなくなってくるって。そしたらやっぱり手をちょっと大変だけでも加えれば付加価値がついて、こういったっていう²⁴。

同じく、今年（2023年）が82歳の元役場職員、村の「生き字引」と言われている IKさんは、次のように語っている。

女性部の加工事業にとっては非常に良い仕事だと思う、頑張っしてほしいね。すごく重要なのは、以前は売れる基準に達しない魚介類は売れずに捨てられていたことで、これは非常にもったいないことだった。それも同じく漁師さんが苦勞して獲ってきたなのに、、、でも今は女性部の加工によって、売れなければ捨てられていた魚に新たな価値を与え、女性部に利益をもたらしているのは、すごくありがたい²⁵。

また、現在の神恵内村漁協女性部は、新商品開発とその販売活動によって、以上のように魚食普及、付加価値向上の影響以外にも、経営形態にも変化が及んでいる。女性部の経営形態にも変化について、ECさんは、次のように語っている。

それまでは(以前は)、ボランティアだった。今は商品開発と販売を行い、利益が出ているため、部員たちには正当な給料が支払われている。今までそういうのはなかったから、沖揚げ祭りをやっていて、販売して得たお金を今度みんなで旅行にと寄付にする²⁶。

²³ 2022年10月4日 MYさんの聞き取りより。

²⁴ 2023年2月9日 NYさんの聞き取りより。

²⁵ 2023年11月9日 IKさんの聞き取りより。

²⁶ 2023年7月16日 ECさんの聞き取りより。

神恵内漁協女性部は、地縁組織として、ほとんどがボランティア活動の存在だった。今まで販売活動から得たお金は「女性部」全体のために使われていた。しかしながら、現在は新商品開発と販売活動から利益できてお金を得ることによって、ボランティアとしての女性部活動は、今は「アルバイト」の形に変わった。出席する部員は、女性部の入口に設置された出席表に、作業内容と時間を記入する。出席する部員は出席表に時間と内容を記録して、給料 1 時間約 800 円~900 円である。そのお金は事務局である NY さんが管理し、月末の時に一カ月の給料を計算する。

このように、神恵内村女性部はコロナの 3 年間を利用して商品開発を行った。加工事業は初心者であったが、周囲の支援を受けながら多くの困難を克服し、現在も続けている。その活動によって形成された小さな地域コミュニティと、その活動によって形成されたさまざまな組織と人々との「縁」については、このあとの章で紹介する。

4-2-3 地域社会における女性部加工品事業の意義

漁協女性部と地域活性化に関わる藤田（2015）の研究によると、各地域における漁協女性部の活動内容は、浜掃除や石けん運動といった地域の環境保全活動、魚食普及活動、福祉活動、女性の地位向上など多岐にわたって、地域に密着した活動を行っている。漁協女性部は、日常的に漁村地域を支えてきた役割に加え、近年は地域特産の水産物や未利用の水産物の加工・販売といった起業活動にも力を入れている。一方で、年々漁協女性部数および部員数は減少しており、縮小化に歯止めがきかない状況にもある。

筆者は 2022 年から 2023 年の 2 年間にわたり北海道における 8 つの漁村を訪れ、6 カ所で具体的な聞き取り調査を行った。その時に発見したのが、新型コロナウイルスにより、各地域で漁協女性部の活動は再開困難な状態になってしまった。その原因の一つとして、漁村の女性たちは女性部の活動を自分の優先順位の低い位置に置いていたことがある。漁村女性は家事と自分の仕事もあるため、女性部や地域組織のことはやることの中でも最下位に置いている。そのため、この 3 年間では北海道で多くの漁村の漁協女性部は活動を休止し、部員同士間でのコミュニケーションも少なくなった。コロナが緩和したあとも、長い休止期間により、女性部の活動再開が困難になってしまった。

しかし、神恵内村漁協女性部は、少し他の地域と異なっている。前述の通り、神恵内村の漁協女性部は、コロナ禍の 3 年間で新しい事業の構想と創造に費やした。新しい商品開発を行い、その新商品販売活動によって、利益を得られただけでなく、女性部自体の経営形態も変わった。このような新規事業を始める際、表面的な成果だけでなく、開発過程にも様々な困難が伴っているだろう。

この節では、神恵内村漁協女性部の商品開発と加工事業における困難と部員たち、あるいは地域の人々の思いを紹介することで、女性加工事業は村によってはどのような存在なのかを考察する。

神恵内村漁協女性部の女性たちは商品開発の専門家などではなく、初心者でもだった。女性部は、これまで普通の冷凍商品は作っていたが、常温商品の開発や味の調整などは零からのことだった。さまざまな困難や問題点があるが、村が全力で支援することによって、今の商品ができたと言える。それらの商品開発は、神恵内村にとって一つの地域ブランドであり、また、地域活性化との繋がりもあると考えられる。

前に、神恵内村漁協女性部の商品開発のきっかけが村からふるさと納税の返礼品に使用したいと依頼を受けたことだったという経緯を紹介したが、ここではさらにその過程でどのようなことがあったのかをより詳しく紹介する。

一番無視できないのは村と村長の支援だった。村と村長の支援には、場所・施設の提供、村以外の組織と連携する機会、販売ルーツまでが含まれる。新商品開発を決める前から、村と地域の人たちは、女性部が商品を作っていることは知っていた。村としては、それを村のために活用したいという思いから、女性部に依頼した。それについて、MYさんは、次のように語っている。

村の方々が私たちはこういう作っていることは分かっていた。（そういう商品が）あるだったらより活用したいという思いがあり、地域振興とかで村のほうも賛成してくれた。それが合致していたから、女性部の新年・総会の時に、村長さんと課長さんレベルの方々が来た時は「もっと作れよ」と言われた。もっと作ってもいいけど、場所がないよね、と言ったら、「この施設（図-5 元保育施設）がちょっと空くから、どうぞ」みたいな感じた。村長が言ったから即決の感じだ。もし課長ならもう少し時間かかるかもね…それでここを安く借りて、許可を取って、鮭フレークを作り始めた²⁷。



図-5 元保育施設、現女性部加工品場

（2022年10月4日筆者撮影）

同じく、最初新商品開発の提案者が村と村長だということについて、NYさんは、こう語った。

²⁷ 2022年10月4日MYさんの聞き取りより。

元々女性部の活動場所は今のところではなく、より小さな場所だったが、村長さんと村の支援によって、現在神恵内女性部施設は元保育施設を加工施設として利用している…最初のコロナの頃も村長がテレビで見て、「女性部やれないか」みたいな感じて、提案されたら正にこれですね²⁸。

また、場所の確保や作り方の困難以外に、夏には作業環境や労働条件が厳しいということもあった。当初の加工場ではエアコンもなく、食材の安全性を確保するため、女性スタッフには特殊な加工着とマスクの着用を義務付けていた。しかし、彼女たちは大変だと言いながらも、実際には喜んでここに来ている。それについて、NYさんは、次のように語っている。

ここは前エアコンがついてない（から大変だった）、その時にここって死者出来ってないか（笑）（冗談とかしていた）。村にエアコン付けてほしいといいったら、すぐについて、びっくりぐらいのスピードで。たまたま中古なものがあるので、いろんなものも村からもらった、だから村長さんがいろんなものを作りたい時は、女性部も「頑張ってやろうか」というふうに²⁹。

村では女性部以外の人たちは、女性部の加工事業について、どの考えているだろうか。神恵内村地域おこし協力隊の2人隊員は、こう語っている。

すごいいいというか、頑張っしてほしいというか、逆にそれがないと、何も出すものなくなる可能性があるかも…村では水産加工品を作っているところが今はもう、僅かになったから、女性部の商品は頑張っしてほしい³⁰。

このように、女性部の商品開発の過程で、場所から作り方、労働環境までの困難があったが、それも女性部部員たちと村と村長さんの支援で解決された。それ以外にも、女性部の商品開発では村と村長の紹介によって、さまざまな村外の組織との連携ができ、新商品を中心とした女性部の新たなネットワークが形成されたことは、以下の章で詳述する。上で書いたように女性部の商品開発の背景には、村や村長さん、地域の人たちからの多くの支持が存在している。村によっての女性部の商品開発は、単に新商品の誕生を意味するだけでなく、村を代表するもの、地域ブランドとなり、村の対外的なコミュニケーションに活用されることが期待されていると言えるだろう。

²⁸ 2022年10月4日NYさんの聞き取りより。

²⁹ 2022年10月4日NYさんの聞き取りより。

³⁰ 2023年7月15日KKさんの聞き取りより。

5 村への愛着

5-1 人の繋がりと場所の繋がり

5-1-1 人との繋がりから生まれた愛着

女性たちの地域への愛着はどのような特徴を持つだろうか。女性たちへのインタビューからうかがえるのは、地域への愛着が地域で暮らしている人との繋がりから生まれたように思われることである。神恵内村は小さな漁村として、村内部の人間関係も密接で、神恵内村の女性たちも、豊かな人間関係を持っている。この節では、地域に住む二人の女性の人生経緯を紹介することで、神恵内村の漁村女性たちから感じた彼女たちの地域への愛着の源を考察する。

一人目の女性は、神恵内村漁協女性部の前部長の EC さん（67 歳）だ。EC さんは北海道積丹郡積丹町美国町(びくにちょう)出身で、実家は漁師だった。兄弟姉妹は弟が 2 人おり、長男は札幌に電気会社に勤めていて、次男は体を崩して実家で一人暮らしをしている。子供は息子が 3 人いる。長男と三男が現在神恵内村に住んでいて、二人の仕事は泊村の警備員で、次男は岩内に住んでいる。現在 EC さんは長男と一緒に住んでいる。20 年間ずっと女性部部長を務めた。結婚した後、10 年をかけて子育てして、30 年前から女性部に参加し、何年か後に副部長から女性部長になった。

EC さんは 24 歳の時に神恵内村出身の夫と結婚し、神恵内村に移住してきた。その時夫の仕事は年中季節によって異なっていた、6~12 月には雪崩防止の網を作るという仕事をしていた、よく北海道内部に出張した。12 月途中から 5 月末までは漁師の仕事をした。16 年前（2007 年）ぐらいから、雪崩防止の網の仕事を辞めて、年中漁師の仕事をしてきた。

EC さんは非常に性格が明るい方で、身体には大きな問題がなく、近年左足を手術したこともあって、立ち仕事が多いため足が痛くなるが、今は村の KDI 漁業部でアルバイトをしている。今もアルバイトをしている理由について、EC さんはこう語っている。

うち（EC さん家）が昔漁師をやっていた時にも手空いた時に KDI さんのところ（KDI 漁業部）に手伝いに行っていた。昔の漁業の仕事は今みたいな感じの機械化されてなかったから、みんなは手でしたから、1 人でも多くなれば大きな役割ができるね。今は、夫が亡くなってもう何年になるけど、黙って家にいるよりは、外に働いた方が楽しいんだ。女性部や浜の仕事にも、皆と話しながらってのはやっぱり楽しいでしょう³¹。

また、ずっと一緒に暮らしていた夫が 5 年前病気で亡くなったことは寂しいと語ったが、2 人の息子が心配する気持ちから神恵内に住んできた。何より大切なのは、村での家族以外

³¹ 2023 年 7 月 16 日 EC さんの聞き取りより。

の人間関係が EC さんの生活の非常に大きな支えになっている。その村での人間関係について、EC さんは、こう語った。

夫が亡くなったのは寂しくないっていえば嘘になるけど、、、でも村では友達もいっぱいいるから、浜の皆もいるし女性部の仲間たちや働きの仲間もいるから、まさに幸せでね。村の皆が頼りになるし、何かあれば手伝ってくれるし助けてくれる³²。

移住者としての EC さんは夫が亡くなった後も、夫と築き上げた人間関係から色んな助けをもらってきた。その中で特に長い年月付き合ってきた KDI さんたちについて、EC さんは、こう語った。

KDI さんの親方もずっと知っているし、付き合いも長いし。夫は元漁師で、船をもちろん持っていた。(夫が)入院したときもちょっと冬だったから、雪は船にかかるとそのままで沈んでしまい、船も駄目になってしまうよね。エンジンもかけないと壊れてしまうからから、その際は(船の面倒を)見てくれる漁師の仲間たちもいた。突然病気でその船のことも全部何の準備もなく亡くなった。残された船は KDI さんと村のもう一人の漁師さんが手伝って全部滞りなく処分してくれた³³。

このように、EC さんは夫から繋がった仲間たちが、生活における困ったことや緊急事態がある時に手伝ってくれる。EC さんはこの村ではそうした仲間がいたから今は幸せと感じている。それは夫が亡くなっても、EC さんは1人のままではなく、周りの沢山のひととの「繋がり」があるからこそ、EC さんは今も楽しく毎日を暮らしているのだろう。EC さんと話している中で非常に村への愛着を感じていた。しかし移住者としての EC さんの「愛着」は、「村」そのものより「地域の仲間たち」への「愛着」の方が大きいと感じた。

それはまさに EC さんが話したように、今の生活における困り事や緊急事態が発生する時に、物理的かつ精神的に支えた、浜や漁師、女性部の仲間たちの存在が大きい。その地域のひととの繋がりこそが、EC さんの「村への愛着」と、彼女の生活における重要な活力の源となっている。

もう一人の女性は、神恵内村出身 47 歳の IM さんだ。IM さんの親は、以前居酒屋と雑貨屋を経営していた。父は亡くなっており、母はすぐ隣に住んでいる。兄弟姉妹は 16 歳離れている姉がいる。高校卒業後は札幌の大学に進学したが、突然骨髄中から正常な血液細胞が造られなくなる難病(MDS)のため、8 年ほど入院した。コロナ前までは病院と村の間で通院を繰り返していた。今は身体の状態は安定して、村に長期間住んでいる。仕事は夫と一緒に村で居酒屋を経営しており、それ以外には、10 年前から毎年 4 月から 9 月まで村の旅行

³² 2023 年 7 月 16 日 EC さんの聞き取りより。

³³ 2023 年 7 月 16 日 EC さんの聞き取りより。

村でアルバイトもしている。

IM さんによると、自分は他の地域だったら生活ができず、仕事もできないと思っている。昔は他の地域の会社にも行ったことがあるが、自分の病気と体は他の地域と会社に受け入れられていなかった。しかし、神恵内村の人たちは自分を「一般人」として見てくれていて、IM さんはそれに非常に救われた。他の会社では拒否されたが、村の皆が仕事を作ってくれることについて、IM さんは、こう語った。

1 回他の会社で働いたときに、やっぱ、わかってもらえなくて、、重いもの持てないことが一つの原因で、（それ以外には）病気があるとか、いろいろあって採用されないことがいっぱいあった。結局浜の人たちは、「いいよ」「こいこい」、「できることあるから来い」って言ってくれた。自分のできることをやりなさいっていう感じで無理なことも言わないし、みんなでやっている作業が私はできなくても、「じゃお前これやれ」っていう作業を与えてくれるから、すごく助かっている。それでもたまに「これは私だったらできないかもしれない」時があって、できないと言ったら、「じゃ IM さんはこれやれ」って仕事を作ってくれるから、すごく（自分が）必要されていると感じた³⁴。

村の人たちとは距離感がないことと、一般人のように扱われていることについて、IM さんは、次のように語っている。

（浜で一緒に働く人たちの中では）すごい年の差があり、親子みたいな年の差だけでも、「とってください」ではなくて、「それ取って～」みたいな感じ。（アルバイトしているところの人にも）私がこれできないってわかったら、別の仕事を与えてくれるから、逆に行きづらいということはない。私はここ（神恵内村）ではないと生活できないというか、仕事はできないなと思っている³⁵。

今の居酒屋の仕事でも皆に配慮されていることについて、IM さんは、次のように語っている。

この飲み屋にしたって、結局（お客としての皆が）自分でビールついてくれる。私が遅いのはわかっていて、持ったら歩くのも遅いのもわかっているから、（IM さんに）「いいの？」「いいかい」（と聞いたあと）いいよって返事して、みんな勝手に飲んでくれているから、すごく優しいところだと思う³⁶。

³⁴ 2023 年 11 月 8 日 IM さんの聞き取りより。

³⁵ 2023 年 11 月 8 日 IM さんの聞き取りより。

³⁶ 2023 年 11 月 8 日 IM さんの聞き取りより。

このように、夫が病気で入院して亡くなった後も、移住者としての EC さんが毎日を明るく生き生きと暮らしているのは、村に仲間たちがいること、そして夫との関係で結ばれた仲間たちや人間関係の存在が大きい。こうした人と人とのつながりは、生活が困ったときに助けの手を差し伸べて、必要なときにはいつでも力になることができる。このように EC さんの村への愛着は、生活と心を支えた深い人間関係から生まれたのではないだろうか。

また、かつて他の地域で身体的な理由で理解されず、受け入れられなかった IM さんは、今では普通に生活し、働けるようになった。彼女にとって、村の人々の彼女に対する態度は一種の救いであろう。同様に IM さんの村に対する愛着は、村の仲間たちが彼女を拒絶するでもなく、過剰に同情するでもなく、むしろ彼女を理解し、受け入れ、普通の人間と同じように接してくれる寛容さによって生まれているだろう。IM さんとのコミュニケーションの過程で最も感じたのは、村の人々の優しさと寛容さ、そしてすべての人に対する温かさだった。このように、神恵内村の女性たちが持つ村への愛着は、そこに住む人々への愛着から芽生えるものなのかもしれない。

5-1-2 帰ってきてから少しずつ生まれた愛着

前述したように、女性たちの村や土地に対する愛着の多くは、その土地に住む人々や、人々とのつながりに由来している。また、同じく村で育った女性たちも、村の外で働いたり暮らしたりした時期があり、彼女たちにとっての「村」はかつて「寝る場所」でしかなく、村のことを何も知らなかった。しかし、さまざまな原因で村に戻り、働き、暮らすようになってからは、次第に地元の人々と触れ合い、村のさまざまな活動に参加し、村のことを知るうちに、村を好きになっていったという事例もあった。

上の変化に伴う多様な生活の部分にも書いた NY さんは、岩内高校を卒業した後、岩内町バスターミナルの事務に就職して 8 年が過ぎた。その時は、仕事も友人も岩内町にいて、神恵内村に住んでいたが、村のことには何も分かっていなかった。NY さんにとって村はただの「寝る場所」だった。岩内町で仕事した時に神恵内村への思いについて、NY さんは、次のように語っている。

私は元岩内町バスターミナルで仕事をしていた。毎日 30 分くらい通勤の生活を過ごしたから、本当、神恵内には、寝るために帰るみたいな感じだ。友達も向こうの方（岩内町）ばかりだし、お休みの日とかも岩内の方に行った。以前（岩内町で働く時）は神恵内村に住んでいるけど、あんまり（神恵内村のことには）興味がなかった。自分の住んでいるところは、別に寝に帰るだけ³⁷。

³⁷ 2023 年 11 月 9 日 NY さんの聞き取りより。

それを変えたのは漁協への転職だった。岩内町バスターミナルの事務 8 年、26 歳の時に岩内町の仕事を辞めて、27 歳に古宇郡地区漁協に転職してきたから、村のことや村の人たちを少しずつ知ってきて、村へ、地域への愛着もそれらのことと共に少しずつ生まれた。

ここに（古宇郡地区漁協）就職してからは逆に、活動が神恵内村ばかりみたいな感じで、そうしてきたら、何かここに愛着が、少しずつ湧いてきた。以前は（転職前は神恵内村に）住んでいるのに近くの人しかわからなくて、漁師さんとかも就職して初めてこんな人いるって知った。向こう側（神恵内村中心の北）にあまり行っていないみたいな感じの場所も、玩具館とかも全然行く機会がないから全然知らなかった。

（こっちへ転職して）仕事をやっぱりそこですると、その人の家、家族とか何か、少しずつ覚えていって、ただ何か興味も湧いて、必然的にここ（村）をもっと元気にしたいなっていう気持ちが出てきた³⁸。

同じく現在神恵内村漁協女性部の部長としての MY さんも、岩内高校を卒業した後は、直接岩内の銀行に勤めて、結婚して札幌にも 2 年間過ごした。昔の MY さんも NY さんと同じく村のことを全然知らなかった。夫と一緒に村に帰ってきたため、少しずつ村のことが分かってきた。MY さんは、こう語った。

（昔銀行で働いていた時は）朝起きて岩内に行って、暗くなって帰ってきた。村とは何の繋がりもないから。だから、当時神恵内に住んでいても村のことは全然わからなかった。今はずっとここにいて、全部を知っているわけではないけど、いろいろなそれこそ女性部部長だからこの会議に出てくださいって言ういろいろな会議があった。そういうことやっていると共に、村のことや、学校関係の組織に出ているから、富士通の DX とその教育 DX のものも聞いている。その神恵ちゃん（富士通の DX が開発したもの）のことも知っている³⁹。

上の二人のように転職して村に帰ってきた後に少しずつ村への愛着が生まれたことと少し異なるのは、20 歳の MA さんだ。MA さんは神恵内村の子供たちと同じ小中学校で、高校が岩内高校だった。MA さんはこう語った。

神恵内村の小中学校は子供が少ない、学校のクラスも 1 つだけで同期も 10 人ぐらいで、周りの人全部知っている子供だったが、岩内高校に行ったら、クラスもクラスメイトも倍以上の人数になって、大きなギャップがあった⁴⁰。

³⁸ 2023 年 11 月 9 日 NY さんの聞き取りより。

³⁹ 2023 年 11 月 7 日 MY さんの聞き取りより。

⁴⁰ 2023 年 11 月 9 日 NY さんの聞き取りより。

でも、MA さんとその同級生たちも、村外の高校に行くので、村への愛着が少しだけ溢れてきた。村に対する思いについて、若い世代の MA さんは次のように語っている。

やっぱり初めはみんな村から出たいと思いながら高校に行く人が多くて、でもきつとみんな高校卒業して、大学とか専門学校行ったり、いろんなところに行ったら、絶対に村が恋しくなるって。同級生のその幼なじみたちは、みんな何か海を見たら、神恵内帰ってきたなって思うみたいな話は絶対に言う。やっぱりここ(村)にずっといると、村の良さがわからない。1回外に出て、そして村のことを客観視してみたときに、自分たちがいかに恵まれた場所で育ってきただっということがわかる⁴¹。

女性以外に、神恵内村の若い男性も同じく、村に帰ってきたから、村のことを知っていつて、村の色々な活動に参加しつつ、村に好きになってきた。ここで紹介する男性は、神恵内村地域おこし協力隊の隊員の KK さんだ。

KK さんは神恵内村出身、村の小中高で育ち、高校卒業のときに札幌に出て専門学校に2年通った。札幌で就職し、3年働いた後、仕事を辞めて戻ってきて協力隊に参加した。最初、協力隊として水産の仕事に従事し、今は富士通 DX 事業の現地サポートの仕事をしている。このように、村で生まれ育ち、一度札幌に就職した後村に戻った若い世代の男性としての KK さんは、地域協力隊になったきっかけをこう語っている。

帰ってきてから協力隊っていう存在を知った。元々村出身なので村の役場の人が結構同級生の親とかがいていう。その同級生の親から協力隊の存在を教えてもらって、なったっていう⁴²。

村に対する思いについて、KK さんは、こう語っている。

僕は元々神恵内村出身だけど、村に対しての思いって実は最初なくて、住んで結構不便だった。だから出たいと思って高校卒業した後に札幌に就職した。村に戻ってくるときも別に魅力を感じたから戻った。最初は同じ出ていたときと同じ気持ちで、あまり関心はなかったんですけど、活動していく上で、神恵内の人たちと触れ合っていく中で、神恵内盛り上げようっていう活動している人たちが、いっぱいいることに気づいた。そこで何か神恵内ってすごいなって思ったり、こういう人たちがいるならいろいろできそうじゃないって思って、少しずつ関心を持ってきて、少しずつ好きになっていったっていう感じだ。僕の気持ちとしてはそれをちゃんと住んでいる人たちに伝わってほしいな

⁴¹ 2023 年 7 月 15 日 MA さんの聞き取りより。

⁴² 2023 年 7 月 15 日 KK さんの聞き取りより。

とは思っているね⁴³。

このように、若い世代の女性 MA さんや男性 KK さんも、MY さんと NY さんのような 40 代の女性たちも、小さい頃は村への愛着がまだなく、あるいは自分で認識していなかったが、一度外に働いた後村に戻って、村における生活と共に少しずつ村の人たちとこの土地と関わってきた。その中で村への感情がどんどん出てきている。

5-2 愛着を持つその先には

前の節では、女性たちが地域への愛着は人との繋がりから生まれたものを紹介した。そして、村への愛着は「地域の人たちの繋がりから生まれたもの」や「一度村外に行ったら村の良さがわかってくる」場合があることを述べてきた。では、その村への愛着を持ったその先には何があるだろうか。神恵内村の女性たちは、20 代の若い世代の女性から、30 代、40 代の女性たちまで、さまざまな取り組みをこの小さな村の中で行っている。この節では、神恵内村における、自分たちの力で村の元気を出させたい女性たちの原動力は何かを検討する。

5-2-1 若い世代の女性が道を選ぶ理由

まず紹介するのは村の祭りにおける女性たちの節に書いた MA さんだ。MA さん（20 歳）は、神恵内村で生まれ育った女性で、小・中学生の時は神恵内で育ち、岩内高校を卒業し、今は札幌国際大学で観光学を学んでいる。MA さんは、今回神恵内村で聞き取り調査をした中で一番若い女性だった。彼女の進路とその決定は村と深い繋がりがあると思っている。なぜ観光学を学ぶことを選んだのか、MA さんはこう語っている。

一つは、神楽をやっていたのがすごく大きい。小学校 5 年生から始めて、兄ちゃんが先に神楽を始めて…（上と同じく）…継承していくともそれよりさらに少ない。だからその中で自分がどうやったらみんなに松前神楽っていうものを知ってもらえるか、と考えた時に、「観光学」に辿り着いた。私が高校卒業した年に、国の無形民俗文化財に指定されて、国にちゃんと認められて、重要なものだよっていうことにその上でもっと魅力とか、重要性とかをもっといろんな人に伝えたいなって思った⁴⁴。

また、観光学を選んだもう一つのきっかけは、母（MY さん）が漁協女性部部長として頑張っている姿を見て、自分も役に立ちたいという気持ちがあった。MY さんによると、昔高校時代に女性部の活動に手伝った以来、女性部の役に立つことを何かしたくて、村に何か貢

⁴³ 2023 年 7 月 15 日 KK さんの聞き取りより。

⁴⁴ 2023 年 7 月 15 日 MA さんの聞き取りより。

献できるものを考えていた。その結果、この小さな村の交流人口を増やしたいという思いから観光学を選んだ。

そして、MA さんが子供時代の神恵内村では、今の倍以上の子供がいた。今の村の様子を見て、寂しさを感じた MA さんは、次のように語る。

いろいろ何やりたいとか迷ったけど、やっぱりこの小さな村で、本当に同級生が 6 人とか何とかの世界で生きてきて、ただ人口が減ってくのを見ていくっていうのは、何か少し寂しい感じがする。何か自分でできることはないか、考えをずっと持っている。何か具体的にこれがしたい方はまだ今は見つけられてないですけど、何かどこかで村の役に立てること、自分の親の役に立てること、そういうのを探してみたい⁴⁵。

卒業した後について、MA さんは、次のように語っている。

すぐに村に戻っても役に立たないと思っている。それこそ卒業した後どこかで何か自分のスキルとかを磨いて、その後村に戻って、そのときに村の役に立てたらいいなと思っている。今は、戻ってきても、観光学を学んだだけの人として、観光が何だか（自分の中で答えが見つけられていない）。観光産業の実態とか、観光産業に関わって生きてきたわけではないから、観光を自分で体験して、どういうものなのか、どういうことが自分にできるのか、さらにそこから見つけていきたい。村の役に立つのはまたそれから先の目標だ⁴⁶。

このように、小学校 5 年生から松前神楽をして始め、村の伝統的な文化・祭りを継承して行きたいという思いと、母と、母がいる女性部に、また、村の活性化に貢献した思いから、自分の将来の方向として、観光学を選んだ若い女性がいた。

5-2-2 愛着を持ちながら起業する女性

若い女性として MA さんは、自分の未来の進路を考えた時、村の活性化に対して、あるいは自分の親に対して、何か役に立てることを探していた。一方で、過疎化や高齢化が著しい神恵内について、その衰退と寂しさを感じ、村の活性化への強い責任感を感じる女性もいる。この項では、2 人の女性の事例を紹介したい。

一人目は、変化を伴う多様な生活の節で触れた YM さん（31 歳）だ。

YM さんは隣の共和町出身だが、夫の関係で神恵内村に移住してきた。YM さんは、夫の YS（31 歳）と一緒に YM 漁業部を経営し、ネット販売や地域ブランド化、SNS での神恵内

⁴⁵ 2023 年 7 月 15 日 MA さんの聞き取りより。

⁴⁶ 2023 年 7 月 15 日 MA さんの聞き取りより。

村の漁師の発信を行っている。YM 漁業部は神恵内村で初めての漁業ネット販売の漁業部だ。ネット販売のきっかけとしては、コロナと共に時代の変化を感じたことだった。その上で友達から漁業ネット販売の推薦とその友達の協力をもらえた。それについて、YMさんは、このように言っている。

ツイッターで自分がネット販売をやっている事例を見たあと、YMさんもやらないかって、最初その友達が協力するからって言ってくれた。もう一つの原因はオンラインショップの時代が来るのではないかと思った。自分たちもこうやってみたら、多くはないけど、結構（他の地域でも）自分たちでネット販売をやっている人がいる。やっぱそういう時代だ。「私達も遅れちゃいけないねっていうので、今一生懸命やっている」⁴⁷。

また、村の漁師としての SNS での発信活動には、神恵内村に新しい漁師を呼び込むための活動もある。自らのブランディングの中にも、自分たちのこと、村のことをより多くの人たちに知ってほしいという思いが込められている。

神恵内村は高齢化や過疎化が結構深刻さがあって、村自体が若い人がどんどん少なくなって、皆は村の外に出たらそのまま戻らないね、、、だから神恵内の漁港自体も若い人がいなくて、年寄りみんな辞めていく、漁師に全然新しい人たちが来ないから、それも呼び込むために活動をしていきたいよねっていうことでいろいろ YouTube とかも始めた⁴⁸。

このように自分たちのことを村の外の人より多くの人に知ってほしいと、自ら時代を感じつつ、ネット販売と SNS での発信活動を行っている女性と漁師家族がいる。

そのもう一人の女性は、神恵内村出身の YK さん（46 歳）だ。YK さんの父や祖父も神恵内村の漁師だった。多くの神恵内村の子供たち同様、小学校、中学校は神恵内村で、高校は岩内高校だった。卒業後は北海道銀行に勤めていた。実家がある神恵内村の過疎化を感じて、村の活性化に貢献したいという思いから起業した。現在 YK さんは宿泊業を第 1 のメインの仕事としていて、それ以外に、村に関する商品開発（食べ物とマスキングテープなど）も 4 年前から行っている。マスキングテープは神恵内村の歴史・祭り・神社・風景と関わる内容で、旅行者に神恵内をいつでも思い出してもらえるようにする思いと、お土産としての便利性を含めている。

それらの商品開発は大部分がコロナの間に生まれたものだ。コロナの時期は他の地域や会社には、大きなネガティブな影響を与えた。しかし、この小さな村には、女性部や YK さんのような、コロナの時間を利用して、自分を磨き、新しいことを取り込む例がいくつもあ

⁴⁷ 2023 年 5 月 12 日 YM さんの聞き取りより。

⁴⁸ 2023 年 5 月 12 日 YM さんの聞き取りより。

った。その中で、YKさんはコロナの3年の時間を利用して、自分のやりたいことと、村が活性化できる何らかの新しいことを考えた。その結果、個人的には調理師免許を取ったし、また、新商品の開発やデザインも、薬膳コーディネーター、発酵食品ソムリエ、村のお弁当作りも、全部コロナの時間を利用しての取り組みだった。こういうコロナの間の時間について、YKさんは、次のように語る。

やっぱり3年間は静かだったから、だから逆にこういうのも考えられたっていうところもあった。本当に今は少し忙しくなってきた、人が動き出して忙しくなってくると、本当に日常の仕事やしなければならないことばかりで、どんどん仕事に追われてしまうね。暇だった3年間、私調理師の免許も取ったし、発酵食品、薬膳コーディネーター、発酵食品ソムリエも全部、、、3年間は暇だった、自分磨きじゃないけどそういうことにも使えたし、そうだからゆっくりこういうデザインとかも、ちゃんとゆっくり考えられたし、お話ししながら打ち合わせもできた⁴⁹。

YKさんはなぜ銀行から宿泊業へ変わったのか、その理由を聞くと、村で生まれ育った人間として、昔と比べての今の村に寂しさを感じて、自分がなんとかしなければという気持ちのほうが多いと語った。そういう村に対する思いについて、YKさんは、次のように語る。

宿泊業をやりたいので、結婚してやろうと思った。それまでは私は銀行で働いていて、全然旅館業ではなかった。子供の頃ってすごく神恵内が賑わっていて、店頭を張る人だとかいっぱいいたし、旅館とかももっと多くあった。やっぱり人口が減って、村の中でもやっぱり減って、止まる場所もなくなってきたし、なかなか元気がなくなってきたっていうのが、、、そういう「賑やかな村」というイメージで育ったのに、大きくなったら、あれ、なんかちょっと寂しいねっていうのがあって、自分たちがやることによって、いろんな人たちに来てもらいたいなっていう⁵⁰。

このように YKさんは村の高齢化と過疎化の深刻さを感じた。神恵内に移住してきてもらいたいけど難しいから、関係人口と交流人口もっと増やしていくのため、村を賑やかにしたいという思いをずっと持っているが、その前に、まずは神恵内村を知ってもらうのが一番重要なことだと YKさんは考えている。

商品を作りたいし、本当は神恵内に移住してきてもらいたいっていうのが、ずっと思っていたことだけど、でもなかなか移住って、難しくって、やっぱり仕事もないし。学校とかはあるけど、でも子供たちにとっては良い環境かもしれないけど、お父さんお母

⁴⁹ 2023年5月12日 YKさんの聞き取りより。

⁵⁰ 2023年5月12日 YKさんの聞き取りより。

さんの働く場所がないとか、そうとなかなか移住って難しいなって思って、、、でも関係人口と交流人をもっと増やしていくことによって、村に住んでもらえなくても、やっぱり村も賑やかになれる⁵¹。

この小さな村では、「小さな村だからこそ、自分のやることは大事」という自分の役割と責任感をしっかりと感じている。YKさんは、次のように語っている。

ここの場所に置かれているのだから、ここで一生懸命サポートを持っていて、この800人だからできること。札幌みたいな大都市だったら、同じように活動していたって全然気にも留めてはくれないかもしれない。この人数が少ないところでやるからこそ、みんなそれぞれ1人ずつが何やっているかっていうのがわかる。それぞれの役割をしっかりと自分のその置かれた場所を、今自分は何をすればいいかなっていうのは、ちゃんとしっかりと考えて暮らすようにしていて、そうしていくべきか、自分がどうするべきかをしっかりと考えている⁵²。

YKさんやYMさんのように、自分の仕事も家族も家事も沢山あるが、小さい頃の村と比べると村の過疎化と高齢化などの問題を感じて、自ら起業や新しいものに取り組んでいる女性はいる。彼女たちは、村の一員として、自分たちが住む土地には、愛着と責任感を持っている。小さな村こそ、一人一人がやっていることが非常に重要であり、一人ひとりが自分たちが住んでいる土地の問題を自ら感じて、大きな責任感が生まれている。彼女たちの村への想い、記憶、愛着こそが、新しい取り組みを始めようとする原動力となっている。

この章では、まず「5-1 人の繋がり」と場所の繋がり」で、一つはECさんとIMさんの事例を通じて、神恵内村の女性たちの村への愛着が、そこに住む人々への愛着、村の仲間たちとの繋がりから芽生えるものであることを明らかにした。もう一つは、若い世代の女性MAさんや男性KKさんも、MYさんとNYさんのような40代の女性たちのように、一度外に働きした後村に戻って、村における生活と共に少しずつ村の人たちとこの土地と関わることによって、少しずつ村に好きになっていることを示した。

そして、「5-2 愛着を持つその先には」では、MAさんのように、自分の進路とその決定について、「村」と深い繋がりがある女性がいることを示した。一方でYMさんのように、自分たちのことを村の外にもより多くの人に知ってほしく、ネット販売とSNSでの発信活動を行っている女性が、YKさんのように村の課題を感じた上に責任感を感じて、色んな起業活動に取り込んでいることを示した。

彼女たちの地域への愛着にはさまざまな要因が存在している。村外部の人から見ると、神恵内村は小さく、交通不便、過疎化と高齢者が深刻な村だ。しかし、こういう村に、彼女た

⁵¹ 2023年5月12日YKさんの聞き取りより。

⁵² 2023年5月12日YKさんの聞き取りより。

ちは強い愛着と帰属感を持っている。そういう彼女たちの村への愛着と帰属感は、「人の繋がり」と「場所の繋がり」から生まれ、人間関係や村の支えによって維持されている。彼女たちの生活や、将来へ向けて現在努力している動力まで、村への愛着が反映されている。

6 地域コミュニティの変容と女性活動によって形成したネットワーク

6-1 地域コミュニティの衰退と復活

6-1-1 失われた場所と取り戻した伝統的活動

神恵内村は、漁業の不振に伴って経済の衰退、労働力の流失、人口の減少、過疎化と少子高齢化に関する問題が深刻に進行していることとともに、地域コミュニティも衰退してしまった。しかしながら、地域コミュニティの維持に尽力している人たちもいる。この節では、神恵内村の地域コミュニティの変化と、地域コミュニティのために努力している女性たちの現状、また彼女たちの活動によって小さな地域コミュニティが復活されていることを紹介する。

神恵内村には、1992年に開業して約30年営業していた温泉があった。しかしながら、その温泉は2020年4月7日から臨時休業し、湯管の交換作業を行った。その際、深さ約440メートルのパイプが、約140メートル地点で破損しているのが判明した。崩れたパイプを取り除けず、源泉から湯を揚げられなくなった。破損したパイプの復旧は難しく、新しい源泉の掘削は多額の費用がかかるため、4月17日（金）に「リフレッシュプラザ 温泉 998（以下温泉 998）」が閉館になった。

温泉 998 は神恵内村の地元住民の方々にとって、集いの場として貴重な施設だった。現在村内に長期滞在して村と連携した事業を行っている富士通 DC 事業の人⁵³が、最初村の優先課題を探そうとしたときに、全戸訪問という形を使って、「村が良くなるにはどうしたらいいと思いますか」、「こういうところで暮らして困ってることありますか」と聞いた。その答えとして一番多いのは、温泉がなくなったことだった。富士通 DX 事業の人は、次のように語っている。

やっぱ温泉がなくなったことが一番困っている。温泉がなくなったことに対してみんなこう言った。「そこに行くと、いつも村の人がいて、みんなで温泉入って、みんなでそこでご飯食べれて、そこがコミュニティスペースとして大きな役割を果たしたが、それが今なくなった。」飲食店も、マルマンショップという店が元々あって、その食堂にみんなが昼になったら行ったりとかしてたけど、今もそれもなくなってしまいました。お昼に集まる場がなくなった。今もちょっと話そうよって言ったときに、（村では）話す場所がないし、カフェとかもない⁵⁴。

⁵³ 2019 年から村の陸上養殖のシステムの設計を富士通に頼んだが、現在は水産業を含め医療、教育、スポーツなどの他の課題も富士通の DX 事業で解決していった。

⁵⁴ 2023 年 11 月 9 日 FC さんの聞き取りより。

このように、過疎化と高齢化に伴う地域コミュニティの衰退が見られてきた。しかしながら、近年もいくつかの地縁活動や女性活動によって、地域コミュニティが少しずつ復活している。その一つは、神恵内村の盆踊りだ。神恵内村では昔盆踊りと「神恵内音頭」があった。「神恵内音頭」は地域にちなんだ音頭があつて、「神恵内によろこそいらっしゃいました」という歌詞がある。それは一度姿を消し、20 数年踊られていなかったが、「愛着を持ちながら起業する女性」の節で紹介した YK さんが参加している地縁組織の神恵内村魅力創造研究会によって、近年から「神恵内音頭」が復活した。神恵内村魅力創造研究会の事務局長としての YK さんは、次のように語っている。

神恵内音頭と、これの振り付けもあつて、それは子供の頃ずっとあつたんだけど、大きくなってきたらもう誰も踊らなくなって、忘れられていた。この伝統的活動は昭和 57 年の、ずっと古いものだ⁵⁵。

神恵内村では温泉のような地域コミュニティとして大きな役割を果たしていた場所が失われたが、一方で YK さんと地縁組織とともに、取り戻した伝統的活動もある。

6-1-1 漁村女性にとってのコミュニケーションの場

小泉（2014）の北海道漁協女性部の活動の役割を考察する研究では、今後の高齢化漁村社会において、女性部を「女性同士の交流、つながりの場」として活用することは地域の重要な役割であり、漁村に居住する女性に「やりがいのある活動」への支援を行うことは、漁村の維持と存続に資するための社会的役割の一つであることを示された。

神恵内村でもう一つ重要な地域コミュニティの役割を果たしているのが、漁協女性部の加工品事業におけるコミュニティだ。神恵内村漁協女性部の加工事業の裏には、村の代表的ブランドを作り、村自体の活性化に繋げるため、村と村長が全力で支援している。これは地域社会に対して、女性部及びその商品開発が果たしている役割である。その中で、今までさまざまな困難を乗り越えてきた一方で、これからの未来の先に女性部はどのような存在になりたいのかと、今のブランドと商品の生産性についての課題も存在している。それらの課題に対しての地域の人たちと女性部の人たちの認識が異なることも明らかにした。この節では地域社会における漁村女性、女性部部員同士によって、神恵内村漁協女性部はどのような存在なのかを考察する。

漁村女性たちは自分の仕事や家事を担っているため、家事が第一優先で、他の地域社会における女性部の活動はほぼすべきことのリストの最後になっている。それでは、女性部部員たちは一体どの時間を利用して女性部の活動に参加してきたのか。自分の仕事と家事などもある場合、女性部の活動時間について、女性部部長としての MY さんは、次のように語っ

⁵⁵ 2023 年 5 月 12 日 YM さんの聞き取りより。

ている。

女性部の皆は自分の仕事があるから、昼間はずっと（自分家の）漁業をやって、その場合は夜に女性部で加工事業をする。一部の部員は子育てがあるので、本当に女性部に来られる時間はなかなか（少ない）、、、子供さんが小学校か保育所に行っていないと来られないからね。でも、夜は夫に子供の面倒を見てもらえるから、夜にくる人も多いね⁵⁶。

同じく、NYさんは、次のように語っている。

昔の漁師は年中無休で、（漁師が）土日は関係ないから...でも今は漁師や水産加工会社も日曜日は休みになった。その時間は皆（女性部部員）の休み時間で、その自分の時間を抑えてここにきてもらっている。でも皆早くきてくれるし、皆が持っていたもの（野菜とか）を料理して、一緒に昼ご飯とかを食べるのも、女子会みたいにワイワイしながら食べるから美味しいね。そういうのも楽しんでいる⁵⁷。

特に、2 新型コロナウイルスの影響を受けた 2019 年からの 3 年間では多くの地域の漁協女性部がコロナを原因で活動を中止されていった。筆者が訪ねた 6 つの漁村地域の女性部とも、新型コロナウイルスの原因で活動も実施できず、部員同士間の交流機会も少なくなつて寂しさを感じた。他の大きな地域と比べると神恵内村は小さな場所だが、コロナの影響も当然受けていて、村全体における地域社会のコミュニケーションの機会や、村人たちが集まる機会も減っていた。その背景の中で、女性部の加工事業が一つの貴重なコミュニケーションの場として存在していた。女性部部員同士間のコミュニケーションについて、NYさんは、こう語った。

もし私たちが楽しく動いた様子を見ていたら、それを見てここで集めたいという思いが（あるかもしれない）。皆さん来てくれて、食べて飲んで、作業をして、その後もみんな一緒にご飯を食べて、今日一日何本できたよとか、そうだねっていいながら、ここで集まるのも、もしかして皆も楽しんでいるかな、と私はそう思っていますよ⁵⁸。

同じく、女性部部长としての MYさんは、こう語った。

今は出席率が高いよね。よく皆さんと一緒にご飯を食べて、作業は大変だけど、楽し

⁵⁶ 2022 年 10 月 4 日 MY さんの聞き取りより。

⁵⁷ 2022 年 10 月 4 日 NY さんの聞き取りより。

⁵⁸ 2022 年 10 月 4 日 NY さんの聞き取りより。

んだな、と感じています。ここ（女性部の活動部屋）はもう布団があれば。旦那と喧嘩したら、家出るときはここで…基本家電とかもある、料理できる道具ある⁵⁹。

その中で小さな問題としては、現在神恵内村漁協女性部の人数は、部長と事務局を含めて 11 人である。元々は過疎化と高齢化が深刻な地域であり、部長は部員を増やしたい思いがあるが、なかなかできない困難なところでもある。部長さんによると、現在の女性部員全員は漁業関係者である。部長さんの MY さんは、次のように語っている。

去年は 2 名新しい方が入って、今までは漁師の奥さんが入って、皆さんも漁業関係の方々なので。でも女性部は誰でもいいことだね。他のところでは漁業関係者じゃない人も参加できる、でもみんな（他の部員）はそう思っていないですね。でも高齢化もあるので、そもそも村では（人がどんどん少なくなっている）⁶⁰。

このように、コロナ禍で全国地域の漁協女性部の活動がどんどん減少してきて、各地域にも女性部部員同士のコミュニケーションの機会が少なくなった。神恵内村の人たちにも集まる機会は減っていたが、女性部はコロナ時期を利用して、新たな取り組み（新商品開発）を行ってきた。部員たちは、自分の仕事や子育ての役割もあるが、皆も自分の時間を抑えて、女性部の活動を手伝ってきた。それも、この静かな 3 年間で、神恵内村の漁協女性部は新しい商品を開発しつつ、加工品を第一目標としている。しかしながら、その裏では部員同士のコミュニケーションの方が大きく、加工場でも漁村女性たちにとっては、一個のコミュニケーションの場になっている。

6-1-2 子供の教育を介した地域コミュニティ

女性のネットワークの多様さはこれまでも言及されている。神恵内村の女性たちのネットワークとして重要なものに子供の教育を介したものがある。そこには「富士通 DX 事業」が関わっている。

富士通が神恵内村との関わりを始めたきっかけとしては、村長から富士通に連絡し、2019 年から（何の？）陸上養殖のシステムの設計を富士通に手伝ってもらいたいとのことだった。その陸上養殖の事業をする過程では、村は水産業だけではなく、医療、教育、スポーツなどの他の課題も富士通の DX 事業で解決していきたいという思いがあった。そこで、2020 年から全面的に富士通の DX 事業と連携し、新型コロナウイルスによる交流困難のため、村に富士通の人材を派遣した。それも総務省の地域活性化企業人という制度を使って、民間から

⁵⁹ 2022 年 10 月 4 日 MY さんの聞き取りより。

⁶⁰ 2022 年 10 月 4 日 MY さんの聞き取りより。

自治体に人を派遣でき、人件費としての 550 万を国が負担する⁶¹というものだ。これも富士通として DX 人材を自治体に派遣する最初の？事例となっている。

神恵内村のような小さな村では、元々も漁業の衰退とともに過疎化と少子高齢化や、労働者流失などの課題があり、村の課題解決といっても複数の課題が存在しており、そのすべてを一度に解決することは困難である。ここで優先課題を探した結果としては、上にも関わった地域コミュニティの課題と、もう一つは村の教育課題だった。

富士通 DX 事業の FC さんとの話からわかったのは、神恵内村の人たちは子供たちに対する思いが非常に強いということである。その中で、特に神恵内村の女性たちが子供たちに豊かに遊んでほしい、豊かに学んでほしいという思いから、近隣の地域の泊村と教育連携することができ、共にオンライン授業や、対面でのスポーツ活動などを行っている⁶²。神恵内村のホームページから、地域連携教育についてはこう説明されている。

漁業の不振等により村自体の過疎化が進むとともに、子供の数は急速に減っていく一方である。そういった中でも、村としての「全村民一体となった教育」の構想に基づき、学校教育が地域全体の発展に貢献する為に、学校のみならず子供たちや父母、そしてその他の地域住民とも連携して、神恵内村らしい「学校教育に取り組んでいかなければならない。また、学校自体も地域の特色を活かした学校づくりを推し進めるとともに、生涯教育の基盤としての小学校の役割を認識しつつ、教育目標の具現化も目指していく⁶³。

また、C さんは、次のように語っている。

神恵内村は小学校中学校合わせても 50 人いかないような学校だけでも、だからって、教育に僻地があってはならないっていうか。遠くに住んでいるから、あっちの都会のような勉強を受けられないではなく。そういう地方でも、地方らしい教育ができるんじゃないかっていうのを、神恵内村は非常にそこ（学校教育）は頑張っているっていうか、CS（コミュニティスクール）って言って、いわゆる地域で子供たちを育てていこうっていう活動を、年に 4 回ぐらい各地域の人たちが集まって話し合っている⁶⁴。

また、上に書いた神恵内村と連携した赤井川村とも、両地区の学校が連携して子供たちの交流や地域交換活動として、稲刈りや牛牧場アイスクリームやバターなどを作ることも行っている。

このように、神恵内村では近隣の地域と連携しながら、地域ぐるみの学校教育を行っている

⁶¹ 2023 年 11 月 9 日 FC さんの聞き取りより。

⁶² 2023 年 11 月 9 日 FC さんの聞き取りより。

⁶³ 神恵内村のホームページ： <https://www.vill.kamoenai.hokkaido.jp/hotnews/detail/00000234.html>

⁶⁴ 2023 年 11 月 9 日 FC さんの聞き取りより。

る。地域がどうすれば子供を育てていけるか、より地域らしく、豊かな学校教育ができるかということ、学校の先生、教育委員会と地域の保護者とみんなで話し合う上で決める。その話し合いの「場」は一つの神恵内村だけではなく、近隣の地域も含めて、学校教育を介した地域コミュニティと言えるのではないだろうか。

6-1-3 「内部のつながり重視」と漁村女性の行動力

ここまで述べてきたように、衰退した地域コミュニティは、村における女性たちの活動によって新たなかつ小さな地域コミュニティを復活してきたことを紹介した。本節では、村の外の人たちの目線から、村の外の人たちがもつ村に対する印象やイメージを通じて、地域コミュニティにはどのような特徴があるかを考察する。

神恵内村と村の地域コミュニティの一つの特徴としては、「内部のつながり重視」ということである。「6-1-1 失われた場所と取り戻した伝統的活動」で YK さんが述べているように、村の中で活動を復興させることはとても良いことだが、村に一時滞在している人たちから見ると、その活動は村の中の人たちに向いている。あるいは、「6-1-2 漁村女性にとってのコミュニケーションの場」にあるように、女性部会のメンバーは今のところ漁業関係者ばかりであり、女性部会に参加するメンバーも漁業関係者向けである。この2つの部分とも、村と女性部の内部結束化が非常に高いことを示している。それについて、YKS さんは、次のように語っている。

村の人たちはいろいろな新しい活動より、昔の活動を復活し、昔の元気だった頃を目指してる。前向きではあるけど、外向きではないと感じている。例えば、村の人たちの考え方としてはネガティブよりはポジティブだけどでも、仲間内で盛り上がる気がする。村全体の特徴でもある。外交的ではないというか、村を盛り上げようって言うても、盛り上げるっていうのが中を盛り上げるっていうイメージがある⁶⁵。

同じく、KK さんも、こう語った。

（村のイベントや活動は） 外からっていうよりかは中の人を楽しんでくれたらいいよねっていう活動が結構多いですね。例えば、神恵内村魅力創造研究会がやってる盆踊りは村の人たちが昔やってた踊りを、みんなで楽しもうって村の人みんなで楽しもうっていうイベントなので。もちろんそのイベントのときに外部の人でも来てはくれるんですけど、どっちかっていうと、中の人向けにイベントをやってるので、外の人でも来てもいいよぐらい⁶⁶。

⁶⁵ 2023 年 7 月 15 日 YKS さんの聞き取りより。

⁶⁶ 2023 年 7 月 15 日 KK さんの聞き取りより。

また、女性部の「内部のつながり重視」について、「4-2-2 神恵内村漁協女性部と女性部の活動」の節でも話したように、現在の女性部部員 11 人全部が漁業関係者であり、その活動も大部分は部員たちだけが参加している。YKさんは、こう語った。

漁業の人たちだけではなくてもお手伝いできることがあったら、私も手伝えることってあると思っている。しかし、きっと商品作ったりとかするのは、少し無理かもしれないが何かやるイベントとか、魅力創造研究会でやってる盆踊りだとか、そういうときには、人手が足りないから「手伝いに来てください」と言ったら、手伝ってもらったりはできると思う。そういう村の皆とのネットワークはあるけど、でも物を作るときに、女性部ではないのに行って手伝ったりとかはきっとできないかもしれない⁶⁷。

神恵内村ではこれまでの内容のように、人間関係が非常に深く結びついている村であり、村内部の活動、盆踊りや祭りなどについては、村の人たちも非常に前向きであるが、外向きではなく、内部の村人を盛り上げる内容である現状を指摘された。

もう一つの特徴としては、男性より女性の方がチャレンジするなど行動力があることだ。神恵内村では、男性たちもさまざまなことに努力して、新たなことに挑戦している男性はもちろんいる。だが、自分たちの仕事や活動なども精一杯で、それ以外の部分に携わるのが少し困難にもなるかもしれない。一方で、村の女性の方は、アクティブな人が大部分であり、行動を起こす人が多いというイメージがある。特に今の若い女性（40代ぐらい）の女性たちはいろいろなことを試して、自分たちも楽しめるように挑戦しながら、村の活性化のため行動している。神恵内村出身のKKさんは、このように語っている。

村の女性たちは、行動を起こす人が多いというイメージがある。どんどん自分たちで新しいことやっていこうよってというような動きがあるね。今できてるかどうかは置いて、そのやろうとしてる意思がすごいあるっていうイメージはある。新しいことではなくても、面白いことやりたいよねとか、昔やってた楽しかったことを、盛り上げてたことをやりたいよねっていうのも、結構上がっている。もちろん男性がそれ全くないわけではないけど、どちらかというと女性の方がそういう活動してる人が多いかなっていう感じがある⁶⁸。

このように、村の外の人たちの目線から、村では「内部のつながり重視」と「漁村女性の行動力が強い」という二つの大きなイメージが示すことができた。「内部のつながり重視」があるからこそ、「5-1-1 人との繋がりから生まれた愛着」の節で書いた ECさんや IMさん

⁶⁷ 2023年11月9日 YKさんの聞き取りより。

⁶⁸ 2023年7月15日 KKさんの聞き取りより。

んのように、村の人たちとの繋がりから愛着が生まれていることや、「5-2 愛着を持つその先には」の節における村の人たちを考える上で取り組んでいる人がいるだろう。「漁村女性の行動力が強い」から、村や地域の人たちが女性たちを信じて、さまざまな支援や協力をしているのだろう。

ここまで述べてきたように、神恵内村は、漁業の不振に伴って経済の衰退、労働力の流失、人口の減少、過疎化と少子高齢化に関する問題が深刻に進行していることとともに、地域コミュニティも衰退してしまった。しかしながら、YKさんと地縁組織のように村から無くなった伝統的活動をもう一度取り戻すことによって、地域の人たちが集まる機会を作っている人がいる。漁協女性部のように、コロナ時期の影響によって神恵内村の人たちも集まる機会が減少していたにもかかわらず、新たな取り組みを継続しながら、漁村女性同士たちのコミュニケーションの場を維持している。さらに、地域の教育連携のように、近隣の地域との繋がりをきっかけにして、新たな地域コミュニティが生まれている。神恵内村の地域コミュニティは衰退したが、地域コミュニティの維持に努力している人たちがいて、またそれらの人たちの活動によって小さな地域コミュニティが復活されている。また、村の外の人たちの目線から、村に対する印象やイメージを通じて復活された地域コミュニティには、「内部のつながり重視」と「漁村女性の行動力が強い」という二つの大きなイメージが示すことができた。

6-2 女性の橋渡し型ネットワーク

6-2-1 女性リーダーの努力

「5-3-2 愛着を持ちながら起業する女性」の節で紹介した神恵内村出身のYKさん(46歳)は、17もの地域組織・団体⁶⁹に参加している。そのうち、教育関係が5つ、神恵内村の地縁組織が9つ、後志地区から北海道や全国規模の団体が6つある。YKさんは神恵内魅力創造研究会の事務局長、しりべし女子会の会長、しりべし未来ネットワークの副リーダーも務めている。まさにリーダーシップが非常に高い女性といえるだろう。

今のYKさんは自分の家事、宿の仕事、商品開発活動をしており、それ以外にも毎週2回ぐらい各団体や組織の活動に参加している。神恵内村の魅力創造研究会では、Facebookで神恵内村に関する内容を発信し、しりべし女子会でもFacebookとホームページで地域PRや地域イベントなどを開催している。しりべし未来ネットワークは、しりべし女子会がしてい

⁶⁹ 2023年11月YKさんとの聞き取りより：1.日本全国顔晴る女将の会 2.神恵内魅力創造研究会・事務局長 3.しりべし女子会・会長 4.しりべし未来ネットワーク・副リーダー 5.神恵内村小学校PTA 副会長 6.岩内高校PTA 監査 7.神恵内村総合戦略委員 8.神恵内村学校運営協議会委員 9.神恵内村観光協会・監査 10.神恵内村商工会助成部理事 11.岩宇地区警察署協議会・会長 12.北海道地学協働活動推進会議構成員 13.北海道景観審議会委員 14.北海道道州制特別区域提案検討委員会委員 15.神恵内村対話の場委員 16.神恵内村対話の場運営委員 17.神恵内村教育委員会・事務評価委員

ることと活動内容は似ていて、男性を含めた地域の男女が地域の課題を皆で一緒に考えている。

多くの団体や組織に参加しているのは、一つの重要な理由としては村の子供たちの教育に非常に関心があることが挙げられる。もう一つの重要な理由は、YKさんが自主的に村の外部に移動することによって、外部の人たちに村を知ってもらおうという考えがある。YKさんは、次のように語る。

一番に思うのは、やっぱりそういうこと（いろいろな組織での活動）をすることによって、「神恵内村」を1人でも多くの人に知ってもらいたい。私が行くことによって、「どこから来ましたか」と聞かれたときに、神恵内っていうところがあるということによって知ってもらえる。自分が動くことによって、神恵内のPRにもなったりする。今回自分はこの地域に行ったけど、「今度は来てください」って皆に言ったら、そこの地域の人に来てもらえたりする⁷⁰。

また、YKさんは宿泊業をしている。その民宿で提供される食事の野菜は神恵内村と地域連携している赤井川村の野菜を使っている。赤井川村と神恵内村は、同じ後志管内にある村である。赤井川村は、四方を山々に囲まれたカルデラ状の地形で、北海道で栽培できる農産物であれば何でも栽培可能という農業と観光業の村だ。神恵内村は、漁業を主産業とし、新鮮な魚介類や水産加工品が豊富である。赤井川村と神恵内村は、後志管内の中で一番人口の少ない農村と一番少ない漁村として、地域連携協力を行っている。二つの村は共同で観光物産展や商品販売をしていたり、学校でも子供たちの交流や地域交換活動として、稲刈りや、牧場でのアイスクリームやバターづくりなども行っている。

さらに、YKさんが行っている宿泊業では、村を訪れる人たち滞在場所を提供し、村の自己PRの機会を自分たちで作っている。「愛着を持ちながら起業する女性」の節で述べたように、YKさんが北海道銀行の銀行員から現在の宿泊業を起業するに至ったのは、神恵内村の過疎化を感じて、村の活性化に貢献したいという思いがあった。今まで民宿に来たのは、北海道の人が多い。その中でも特に50代から70代までの人が多い。今自分がやっている宿泊業が村にとってどのような役割を果たしているのかについて、YKさんは、次のように語っている。

MYさんたちはちゃんと魚をとってくる。YMさんたちはとっていきながら、漁師さん目線で発信している。うち（YKさん）はよそから来るお客さんも受け入れながら、神恵内のものを出す。それ以外にも、こうやってお土産で持っていけるものを作っている⁷¹。

⁷⁰ 2023年5月12日 YKさんの聞き取りより。

⁷¹ 2023年5月12日 YKさんの聞き取りより。

YKさんはこのように、さまざまな団体の活動に参加し、個人として村外部との繋がりを作っている。なぜこれほど地域組織・団体の活動などに力を入れているのか、YKさんの話から明らかにしたのは、人口が770人しかいない神恵内村では、既に1人1人の行動を大切にしなければならなくなったため、村のことや活性化のことも、「あの人がやればいい」、「この人がやればいい」と思うのではなく、村のことを自分たちのことにしないと、村の現状を変えることはできない、ということである。都市やより大きな町に住んでいたら、「誰かがやってくれる」という思いがあるかもしれない。しかしながら、この小さな村ではその「誰か」はいない。このことこそが、YKさんのような村民たちの責任感を呼び起こすのではないだろうか。

6-2-1 女性部の「橋渡し型」ネットワーク

パットナム（2006）はソーシャル・キャピタルを「個人間のつながり、すなわち社会的ネットワーク、およびそこから生じる互酬性と信頼性の規範」と定義している。ソーシャル・キャピタルは、同じグループ内における構成員間のつながりを強める結束型ソーシャル・キャピタルと、異なるグループ間をつなぎ合わせる役割を果たす橋渡し型ソーシャル・キャピタルに大別される（八巻ほか 2014）。「結束型」は集団内部のつながりを強化するものとして作用し、価値観やアイデンティティの共有を促すとされる。

一方での「橋渡し型」は、異なる集団や異なる分野間をつなぐ役割を果たすことから、外部の資源や情報へのアクセスを可能とし、協力や援助、新たな情報や知見を異なる集団から入手する際に有効とされる（八巻ほか 2014）。また、同じく八巻ほか（2014）の研究によると、Bodin and Crona（2009）は、新たな事業の創出や製品開発といったイノベーションは異分野間どうしのタイアップから生み出されることが多いといわれるが、「橋渡し型」は異なる集団どうしをつなげ、新たな価値を生み出す際に大きく役立つとともに、集団を取り巻くさまざまな環境の変化に応じて外部からの資源を活用し、柔軟に対応していくうえで重要であることを指摘した。ソーシャル・キャピタルをネットワーク的側面に着目して模式的に表現すると図-6 のようになる。「橋渡し型」は図-6 の中に示している。本節では、これらの概念に基づいて、神恵内村漁協女性部といろいろな外的組織との連携経緯を紹介することで、女性部の活動により形成された「橋渡し型」ネットワークを明らかにする。

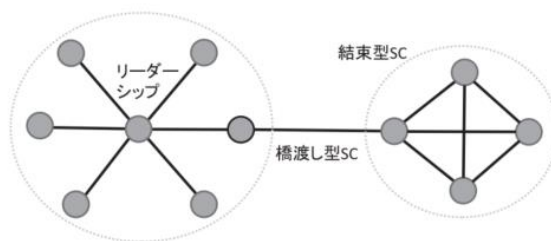


図-6 人的ネットワークの模式的表現（八巻ほか（2014）223 ページ）

女性部は、商品開発活動、他の地域の女性部大会活動によって「橋渡し型」ネットワークを形成している。その中で、特に新商品開発をきっかけに、さまざまな組織の協力、連携を得ると同時に、さまざまな外部組織ともつながり、新商品を中心にネットワークを形成していった。

北海道各地域の漁協女性部では年 1 回～2 回の地区大会が行われている。神恵内村漁協女性部にとって、地区大会は同じ漁村女性たちのネットワークを形成できるだけでなく、他の地区の女性部と話しすることによる自己啓発と動力にもなっている。それについて、女性部部長の MY さんはこう語っている。

大会行ったら誰かの話聞いて、よその組合の女性部の話を聞いていたら、よそはこういうことやっているんだっていうふうな知識になるでしょう。だからそういうのに出るだけでも、私たちには自己啓発になると思うんだよ。他の女性部の話を聞いたら、自分たちもやらなければみたいな気持ちになる⁷²。

神恵内村漁協女性部はコロナの時期から、新商品開発を行っている。それをきっかけとして、さまざまな個人・団体とも連携している。

女性部の新商品開発と連携した組織のひとつは、ノーステック財団だった。ノーステック財団は、北海道の科学・産業技術の振興と経済の発展を目指す公益法人だ。ノーステック財団では、医療、IT、食、環境どさまざまな分野で事業支援を行っている。その中に、地域商品づくり（食品・加工品）支援という事業があり、主には道内の農水産品を使用し、道内にある加工施設を活用して、1 年間で新商品開発を目指すための補助金を提供する事業だ⁷³。また、開発後には、展示会・発表会、EC サイトや各社バイヤーなどを通じて、新商品の販路開拓も支援する。神恵内村漁協女性部とノーステック財団の連携は、村と村長さんからの推薦を得て実現した。ノーステック財団との連携について、女性部部長としての MY さんはこう語っている。

村長からこういうのがあるんだけど、「どうですか」と聞かれ、急に呼ばれて、会議をした。最初、女性部の皆は「こんなのはできないよね」と思った。でも、村の方が「女性部は行ける」とかの感じと、もう申し込みした、と言われた。何を作るか、とみんなと相談したら、サクラマスに決まった⁷⁴。

村の推薦と村民たちの信頼と共に、神恵内村漁協女性部はノーステック財団との連携が決まった。その後は、支援をもらえる対象数が限られているため、複数の組織・会社から商

⁷² 2023 年 2 月 7 日 MY さんの聞き取りより。

⁷³ 公益財団法人 北海道科学技術総合振興センター NOASTEC Foundation R&D and Business Promoting Division : https://www.noastec.jp/web/other/files/2022Cluster_Report.pdf

⁷⁴ 2022 年 10 月 4 日 MY さんの聞き取りより。

品の選考を行った。最後は 18 件が選ばれ、支援をもらえることになった。魚を使ったのはその 18 件のうち 2-3 件ぐらいだった。ノーステック財団への発表会が開かれ、沢山の会社や組織の代表者が参加し、様々な新商品を検討した。その発表会をきっかけとして、いくつかの会社・組織は村長や村に連絡して、女性部と連携したいという話もあった。その一つが東京羽田空港だった。羽田空港は発表会を見て、「北海道の味」というテーマを羽田空港で期間限定販売するイベントに神恵内村の新商品を招待した。それについて、MY さんはこう語っている。

新商品は羽田空港に置いてもらうことになった。羽田空港や他の団体が発表会を見たあと、「新商品をうちで売ってみませんか」っていうふうに言ってくれた。村長さんも結構売り込んでくれているところがあって、お付き合いのあるところにお土産として持って行って配っていて、いろいろなところで配っている⁷⁵。

女性部の新商品開発と連携したもう一つの組織は、地域商社キットブルーだ。キットブルーは、地域商社であり、神恵内村・岩内町・泊村の産品を「積丹半島ブランド」「北海道ブランド」として磨き、育て、稼ぎをつくっている組織だ。

キットブルーとの繋がり、は、キットブルーと関係のあるデザイナーを中心に築かれた。キットブルーからは、商品説明内容の考え方や常温商品の方向性、3 セットの販売戦略など、アドバイスをもらったという。

(キットブルーの) 皆さん神恵内に来てくれて、商品の開発を相談してくれるという、セミナーの方が来て、1 時間ぐらいお話聞いてくれて。3 本セットになりたいと言ったら、「じゃあ、和、洋、中と言う考え方もありますよ」と。そういうアドバイスはさまざまある。女性部の自分たちだけではできない⁷⁶。

また、デザインさんが従属する MOOI デザイン会社からも、女性部の新たなゴマークと一緒に開発した。昔の漁協女性部の印は青の波模様のロゴマークだったが、新たなロゴマークは赤を採用し、未来永劫の平穏を願う日本の伝統文様「青海波（せいがいは）」を女性たちの愛情を表すハート型になった。また「港の姫たち」というテーマで女偏（おんなへん）を魚に見立て、誰でも簡単に描ける「姫印（ひめじるし）」（図-7）を採用した。新たなロゴマークについて、部長としての MY さんと NY さんは、こう語った。

この「ハート」（の形）は女性らしさで、「姫」というのを「姫」マークの感じで。誰が見ても女性部だよとわかるものを作りましょうって、いくつかの案の中で選んだの

⁷⁵ 2023 年 2 月 7 日 MY さんの聞き取りより。

⁷⁶ 2022 年 10 月 4 日 MY さんの聞き取りより。

はこれだ。赤は珍しい。水産加工品で、ブルーがやっぱり多いので、逆に目立つね。こういうものがもし並んでいたら、自分たちもこれを選ぶね⁷⁷。



図-7 神恵内村漁協女性部「姫印（ひめじるし）」

（2022 年 10 月 4 日筆者撮影）

このように、デザイナーの助けをもらいながら、女性部のブランドのロゴマーク開発は女性部の、浜のお母さんたちの思いが含まれている。。

また、デザイン会社には印以外にも、在籍している食品のアドバイザーの方からいろいろな商品へのアドバイスをもらった。特に、MY さんの話しから、その時期はコロナで冬の時期だったが、デザイン会社は札幌にあるため、人の移動自体が難しかった。しかし、アドバイザーの方に神恵内に来てもらったり、開発途中の商品を送って、zoom の会議中に食べて、感想や考えを共有したりもした。

デザイン制作と並行して、催事や地元での販売時のサポート、情報発信に関するアドバイスももらった。また札幌市街地の店舗視察・見学なども実施し、地域外への展開をさまざまな側面からサポートしてもらいながら「一緒にブランドを作ること」を現在進行形で行っている。

それ以外にも、神恵内村自体の役場や、道の駅、村長などとさまざまな繋がりや連携もある。神恵内村漁協女性部も商品を開発する 2 年間の間にさまざまな人や団体と一緒に活動を展開した。部長の MY さんは、こう語っている。

最初の商品開発に対し私たち（女性部の人たち）がほんとに素人だった。でもいろいろな人たちから助けをもらってながら、いろいろな知識を勉強して、いろいろな人に巡り合わせてもらった。びっくりするぐらいのこの 2 年間駆け抜けて、たくさん人とであって、ようやく新商品ができた。⁷⁸

⁷⁷ 2022 年 10 月 4 日 MY さん、NY さんの聞き取りより。

⁷⁸ 2022 年 10 月 4 日 MY さんの聞き取りより。

同じく、NYさんも次のように語っている。

最初はレトルト（加工品）の知識も何にもなかった。（最初の時は）やってみたら、全然イメージと違うようにできてしまった。（その後は何度も試し、味の調整とかが繰り返した）1年以上の時間をかかって、いろいろなアドバイスをもらって、いろいろな人が助けてくれて、やっとできた⁷⁹。

このように、女性部としての外のつながりを生じさせる「橋渡し型」ネットワークは、キットブルーやノーステック財団という外部からの情報、知識を入手し、新たな商品開発やイノベーションを推し進めるなど、さまざまな関わりや連携を女性部にもたらした。ほかにも、「橋渡し型」ネットワークは、さまざまな外部からの資源を入手することを可能とするため、リスク分散や外からの支援、協力を得るのに有利であるとされる。これも、漁協女性部の生産活動によって、村外部の団体や組織と一種のネットワークを形成しているのではないだろうか。

6-3 地域ブランド作りと村の発展における課題

上に書いたように個人であれ、女性部であれ、神恵内村の村民たちが力を入れて地域社会に貢献している。神恵内村の女性部も地縁組織としてここ数年努力をして活動が非常に活発になっており、村の地域ブランドを作っている。しかし、高齢化や労働力の流出など、村の抱える問題は長く続き、これらの問題は決して簡単に解決されることではないだろう。女性部にしても、神恵内村の活性化にしても、まだまだ改善・調整が必要な部分も存在している。本節では、女性部の地域ブランド作りとしての生産活動と、神恵内村の今後の活性化における問題と、今後解決すべき課題について見ていく。

6-3-1 地域ブランド作りにおける認識のズレ

地域ブランド作りについては、これまで「4-2-3 地域社会における女性部加工品事業の意義」「6-2-2 女性部の橋渡し型ネットワーク」の節で、現在村で行われている地域ブランド作り、すなわち女性部の商品開発や加工品事業を紹介した。また、神恵内村漁協女性部についても、「4-2-2 神恵内村漁協女性部と女性部の活動」「6-1-2 漁村女性にとってのコミュニケーションの場」を通じて、女性部の歴史や現状、また女性部のコミュニティを考察した。

神恵内村漁協女性部では、現在商品開発や加工品事業を中心にして活動していて、その商品も村の活性化と繋がっているように見える。今までは村内部や女性部部員たちから加工品事業を考察してきた。しかし、村外の人から見ると、現在地域ブランド作りは村人の認識

⁷⁹ 2022年10月4日NYさんの聞き取りより。

とは少しのズレがあった。そのズレを紹介する前に、まずは今の女性部における地域ブランドが、どのような課題に直面しているのかを考察する。

一つは生産規模が小さくため、商品の量も少ないこと。これらの課題に対して、神恵内村地域おこし協力隊の隊員は、こう語っている。

女性部の商品は品質にこだわっているね。そこを外から見ていると少しこだわらなくていいから、量産したらいいのではないかなと思うぐらい。質にこだわっているから、分量が少ないけど、それがいい感じにブランドになってくれたら本当はもっと価値が出るだろう。今はブランドとして確立できてないから。少しそのバランスは今まだ悪い状態かもしれない⁸⁰。

もう一つの課題は、現在はすべて女性部部員が生産していて、部員の人数も少なく、人手不足であることだ。これについて、地域おこし協力隊の隊員のもう一人は、次のように語っている。

そのこだわりは全然いいと思うけど生産ラインというか、生産量が問題で、もちろん人手不足もあったり、その材料もあったりいろんな要因があると思うけど、一つ生産ラインの人手不足の部分が解決されれば、、神恵内のラインを作るっていうのは今の状態だと、村の人たちだけなら難しいので、先ほど言った会社が来てくれて、それを整えてくれれば違うっていうことだね⁸¹。

このように、地域の人としてはこういう考え方もあるが、実は今の女性部加工事業のあり方も成立だが、女性部の方はどう考えているのか。今の女性部の生産性が高くないという問題について、NYさんは、こう語った。

もし万が一嬉しいことに、たくさん欲しいって言われたら、たくさん作れない。私達は本業が漁師の奥さんだから、自分の家の仕事があるから、女性部の活動も大事だけでも、どうしても、二の次になってしまうから難しい⁸²。

なぜ女性部は生産規模の面では他の会社に連携したくないのかということに対して、NYさんは、次のように語っている。

あんまり意味がないかなと思う。私個人としても、きっと他の人もそうかな。浜のお

⁸⁰ 2023年7月15日KKさんの聞き取りより。

⁸¹ 2023年7月15日YKSさんの聞き取りより。

⁸² 2023年11月9日NYさんの聞き取りより。

母さんたちが作ったもの、そこに意味がある。買う人も浜のお母さんが作っているんだったら、美味しいよねと思ってくれる。どっかの会や水産会社とかに委託すると、お母さん方は海で魚とってきているわけじゃないから、それだったら「浜のお母さん」が作ったものではない。自分たちがやれる範囲で、地元で採れたお魚を加工し、それを自分たちの収入として、みたいな。何となく実感も湧くし、あと責任も持てるから⁸³。

ここからわかるのは、地域の人たちが認識した女性部の生産活動の課題と、女性部自身の認識の間には少しのずれが存在しているということである。女性部の今のあり方も成立だと考えているが、地域ブランドになりたいとしたら、これからも少しのバランス調整や経営計画が必要と考えられるが、その大量生産できないことも一つの強みではないかと考えられる。

上に NY さんが話したように、女性部に所属する女性たちのほとんどが主婦としての一面を持っている。そのため、家庭との両立が女性部に活動する上での必須条件である。その他さまざまな仕事とも並行して商品づくりをするため大量生産ができず、流通に乗せるための安定供給は非常に難しいだろう。

しかし、加工前に一旦冷凍処理される一般的な流通商品に対し、前浜で水揚げされたばかりの新鮮な魚をそのまま加工・パッケージングできるというのは非常に大きなアドバンテージである。これが神恵内女性部の商品が美味しいと言われる所以だ。「品質は高いけれど、多くはつくれない」これこそが神恵内女性部の商品の魅力であり、ブランドのコアとなるオンリーワンの価値だろう。

このように、新たな試みを行い、村のブランドを作っていて、生産活動にも努力している女性部については、生産規模が小さくため、商品の量も少ないことと、部員の人数も少なく、人手不足の解消も難しいという二つの問題がある。その中でも、この地域ブランド作りに対して、「女性部の人」と「村外の人」の両者における認識なズレが存在しているが、それも神恵内漁協女性部の特別なこだわり、信念、また生き方になっている。

6-3-2 村の活性化を阻むもの—情報流通、移住者の難点と認知度

北海道で一番小さな漁村という特徴がある神恵内村の現在は、総人口が 762 人であり、漁業の不振に伴って経済の衰退、労働力の流失、人口の減少、過疎化と少子高齢化に関する問題が深刻に進行している地域である。そうした客観的な問題や課題のほかに、実際に村に住んでいる村民たちを見ると、神恵内村ではどのような問題があるのか。

上に書いた YK さんや MY さんたちにも、過疎化と少子高齢化、人口の減少などの問題を自ら感じているが、ここで言いたいのは、それ以外の課題である。一つは、村では多くの人が地域コミュニティのためにさまざまな努力をしているが、地域コミュニティにはまだ

⁸³ 2023 年 11 月 9 日 NY さんの聞き取りより。

いくつかの課題がある。

そのひとつが地域の情報が回っていないという地域コミュニティとしての課題である。地域の情報が回ってなく、地域の情報は月に1回の広報誌、告知放送防災無線による放送、この2つしかいない。これについて、FCさんは、次のように語っている。

村にはこれ以上の情報が毎日生まれている。例えば、女性部が新しい商品作っている、昨日見える綺麗な夕日など、そういう村の何気ない情報も発信していくと、なんか「田舎だから何もないよね」から、「田舎けどこういうものがあるよね」みたいな（認識が変えられる）⁸⁴。

この課題を緩和するために、富士通とFCさんの協力から開発したのが地域コミュニティ機械―「かもちゃん」である。それは、神恵内村でのスマホの保有率が7割ぐらいであり、SNSで情報発信したらその3割の人が情報発信の対象から除外されてしまう。そうすると、デジタルコミュニティを作ったとしても意味がないという思いから、スマホが不慣れな人でも使えるような端末を開発した。それが「かもちゃん」である。

もう一つは、移住者を受け入れたいが、村で働ける仕事が多くなく、空き家があるが住むところがないという課題がある。

神恵内村では移住したい人もいる、例えば地域おこし協力隊の隊員たちが、3年任期が終わったら、元々は村に移住する予定だったが、その可能性が低いと隊員のOSさんが語っている。

移住することは目指してはいるけど可能性が低い。まずは、仕事がない。（村での仕事は）自分で起業するか、役場の職員になるかぐらいしかない。後は、村を拠点にして稼ぎに出るとかもある⁸⁵。

もう一つは、住むところがないことについて、YKSさんが語っている。

移住すること自体対してネガティブな思いはない、村は好きだから、あと単純に家がないってことだ。今（地域おこし協力隊の仕事のため）は村が紹介してくれたうちに住んでいるが、任期終わったら、多分他の場所に引っ越さなければならない。自分で家を探さなければならないけど、村の現状は家がない。空き家はたくさんあるが、空き家がまず持ち主がわからなかったりしている。だから、譲渡ができないオブジェクトみたいな感じで、廃墟みたいだ⁸⁶。

⁸⁴ 2023年11月9日FCさんの聞き取りより。

⁸⁵ 2023年7月15日OSさんの聞き取りより。

⁸⁶ 2023年7月15日YKSさんの聞き取りより。

さらに、神恵内村という認知度が低いという問題もある。「6-2-1 女性リーダーの努力」の節で言及されていた女性リーダーの YK さんや女性部部長の MY さんも、対話の中で、村に対する認識が非常に低いと述べたことがある。また、「4-1-1 変化に伴う多様な生活」言及されていた移住者の YH さんも、こう語っている。

もっと評価されるべきもの、他の人にもちょっと注目されるべきものだと思っている。村としての認知度その前に、まずは「神恵内村」という村を知らないし、字も読めない。村の認知度を上げるための起爆剤が必要だと思う。例えば、YouTube とかで、この村で発信する人がいて、その人がめっちゃ注目されれば、起爆剤になって、あの商品とかもめちゃくちゃ今より売れるようになる。移住者とかも増えてくる良さが広まれば、知らないところなくなるかもしれない⁸⁷。

このように、村民への聞き取り調査から、女性部の地域ブランド作りとしての生産活動と、神恵内村今後の活性化における問題、また今後解決すべき課題についてはいくつか見つけられた。まず、女性部の新商品開発と地域ブランド作りは、新たな試みを行え、生産活動も努力している。また、村や村長さんの支援と、いろいろな団体・組織からの協力をもらいながら、「成功」している。しかし、生産規模が小さいため、商品の量も少ないことと、部員の人数も少なく、人手不足の解消も難しいという二つの問題がある。地域ブランド作りに対して、「女性部の人」と「女性部以外の人」の両者における認識のズレが存在しているが、それも神恵内漁協女性部の特別なこだわり、信念、また生き方になっているだろう。

また、村全体の今後の発展から見ると、過疎地域としての神恵内村は、地域の情報が回っていないという地域コミュニティの課題と、移住者をもらいたい、村で働ける仕事が少なく、空き家があるが住むところがないという課題と、神恵内村という認知度が低いという課題が明確になった。村として今後は、以上の問題を解決しなければならないと考えられる。

⁸⁷ 2023 年 11 月 10 日 YH さんの聞き取りより。

7 おわりに

7-1 地域における女性の力

本稿の最後に、これまで述べてきたことをまとめよう。本稿では、漁村地域である北海道神恵内村における女性の暮らしぶりを紹介することにより、地域社会における女性たちの役割や女性活動によって形成されたネットワークを考察し、漁村活性化における彼女たちが持っている「力」と可能性を明らかにすることを目的とした。

第1章では、研究の背景として、高齢化が進む漁村では女性たちも重要であることを指摘したうえで、本稿では漁村女性の役割と地域活性化における女性たちの「力」に注目して論を進めることを述べた。

続く第2章では、まず、日本における漁村女性たちに関する先行研究について検討した。2000年代以前の先行研究は、海上作業という漁業の中心的な労働における女性の関わりに焦点を当てており、家族経営漁家における世代員の就業構造と、世代内における女性の地位変化に注目していた。2000年代以降の先行研究では、各法律の整備とともに、女性が漁村地域と水産業の維持の役割や担い手になったことや、漁村の女性たちが直面した課題が議論されたが、一方で、地域活性化や漁村地域全体から考察する研究が少ないことも指摘した。

第3章では、まず研究対象地としての神恵内村の地理、人口などの現状を紹介し、その上で、北海道で一番小さな漁村であることを特徴としている神恵内村が、漁業の不振に伴って経済の衰退、労働力の流失、人口の減少、過疎化や少子高齢化の問題が深刻に進行している地域であることを明らかにした。そして、神恵内村の歴史を「場所の歴史」「生活の歴史」「漁業の歴史」の3つの部分に分けて詳しく紹介した。

第4章では「生活の場」「村の文化の場」「仕事の間」における漁村女性たちの現状と姿勢に着目し、特に漁家の娘、嫁、女性漁業者、移住女性などの女性たちが、村においてどういう位置づけにあるのか、異なる「場」でどのような役割を果たしているのかについて論じた。「生活の場」では、女性たちの「結婚」や「子育て」といった節目に注目し、女性たちが変化に伴う多様な生活現状を有していることを解明した。しかしながら、彼女たちは、生活の中での瑣末なことに惑わされることなく、暮らし続けながら「やりたいこと」を実現できる機会を静かに待っている。そのような柔軟な対応のできる漁村の女性たちの力や自立の方法こそが、村の生活の基盤を支えているのだと思われる。「村の文化の場」については、神恵内厳島神社の例大祭への参与観察から、祭りにおける女性たちの現状を紹介し、地域の女性たちが祭りの中で果たしている「重要な参加者」と「サポート」の役割を解明した。また、「仕事の間」については、「浜の仕事」と「女性部の仕事」の2つに分けた。それらの仕事は、女性たちの生活面に大きな役割を果たしながら、地域漁業を支えているだけでなく、地域の小さなコミュニティの形成という役割をもっていることも明らかにした。さらに、漁協女性部の歴史とあゆみを記述し、さらに、神恵内村漁協女性部の新たな活動、すなわち新

商品開発の経緯を紹介した。そこから、神恵内村女性部の加工品事業が、単に新商品の誕生を意味するだけでなく、村を代表するもの、つまり地域ブランドとなり、村の対外的なコミュニケーションに活用されることが期待されていることを明らかにした。

第5章では、村内部の密着な人間関係に着目し、女性たちの「村への愛着」が、「生活と心を支えた深い人間関係から生まれ、村で住む人々への愛着から芽生えるもの」と「一度村から出るが、帰ってきてから少しずつ生まれた愛着」という二つの特徴をもっていることを解明した。20代女性のMAさんは進路とその決定において「村」と深い繋がりがあり、YMさんとYKさんは過疎化である村に対する責任感を感じて今の起業活動を始めた。このように、強い愛着と帰属感を持っている女性たちが将来へ向けて努力していたり、積極的に起業活動を行っていることから、村への愛着が実際の生活に反映されていることが明らかになった。

続く第6章は、第4・5章で取り上げた内容に基づいて、神恵内村の地域コミュニティの変容と、女性活動によって形成したネットワーク、または村外の人たちから見た村の特徴を考察した。さまざまな地域問題と、地元住民にとって貴重な集いの場だった温泉998の閉館とから、神恵内村の地域コミュニティが衰退した。しかしながら、YKさんの事例のように、地域の人たちが集まる機会が新たに作られている。また、漁協女性部も、新たな取り組みをしながら、女性たち同士のコミュニケーションの場を維持している。さらに、子どもの教育上の連携によっても近隣の地域との繋がりが生まれている。これらの女性たちの活動によって、新しくかつ小さな地域コミュニティが復活していることをここでは示した。また、村の外の人たちの目線からは、村に対する印象やイメージを通じて復活された地域コミュニティに「内部のつながり重視」と「漁村女性の行動力が強い」という二つの大きなイメージがあることを明らかにした。

次に、第5章で紹介したYKさんを女性リーダーの側面から考察した。17個の地域組織・団体を参加しているYKさんが村外部ともっている繋がりに着目し、女性リーダーの「力」とその原動力としての責任感について分析した。そして、女性部としての外とのつながりを生じさせる「橋渡し型」ネットワークによって、いろいろな関わりや連携が女性部の新商品を中心として行われていることを明らかにした。また、このネットワークは、さまざまな外部からの資源を入手することを可能とするため、リスク分散や外からの支援、協力を得るのに有利であることを示した。さらに、漁協女性部の生産活動を通じて村外部の団体や組織と一種のネットワークが形成していることを明らかにした。また、村全体の今後の発展から見ると、過疎地域としての神恵内村は、移住者によっては「仕事がなく」、「住むところがなく」などの難点があり、地域全体地域情報の流通と低い認知度の課題も指摘した。

ここまで述べてきたように、本稿では、漁村女性の暮らしぶりを詳しく紹介することで、漁村の生活を豊かにしようとする「漁村女性の役割と力」に注目した。それによって、漁村出身の女性や嫁だけでなく、漁業や漁村にかかわるさまざまな女性たちを考察の対象とした。そして、そうした女性たちの日々をつなぐ生活や生きるあり方を観察した。

魚価の低迷、生産コストの増大などの原因を背景に、漁村では、漁獲量や所得が減少し、担い手・後継者不足や雇用の減少といった様々な問題を抱えている。衰退が続いている漁村と水産業には、漁村の活力を向上させ、維持していくことが不可欠である。「男性の産業」というイメージが強い漁業だが、男性だけでは存続できない。本稿で述べてきたように、多くの漁村女性たちが陸上作業を通じて漁業に貢献している。YK さんや MY さんと NY さん、または神恵内漁協女性部のように、漁村における地域の課題を解決するため、自ら直売所や郷土料理を提供し、水産物の付加価値を向上させ、地域ブランド化するなどをしている女性たちもいる。また、地域の暮らしの中でも、女性たちは、子育てや家事をカバーしながら家庭を支えるだけでなく、男性たちにはない「気づく力」も持っている。生活者目線を持つ女性たちは、地域のちょっとした困りごとや小さなニーズに気づくことにも長けている。そして、女性の特性ともいえる、横につながる力を発揮しながら、気づきと気づきを結び付けて活動を広げている。第 6 章で書いた神恵内村の女性たちのように、地域コミュニティは衰退しても、女性たちの活動によって新しくかつ小さな地域コミュニティが復活している。さらに、女性個人リーダーと女性部の「橋渡し型」ネットワークのように、外部との繋がりが増え、外部からの情報や知識を入手し、新たな商品開発やイノベーションを推し進め、リスク分散や外からの支援、協力を得ることもできる。その結果、地域には彩り豊かな花が咲くことと、漁村活性化に資する様々な取組を推進することもできる。

漁業では「獲る」前の準備や「獲る」後の選別から加工、販売まで、女性たちがずっと役割を果たしていた。しかし、「獲る」現場にいない女性は見えない存在であり、漁村の生活における女性たちの役割についても「当たり前」と言われてきたことばかりだと感じるかもしれない。だが、それは当たり前ではなく、柔軟な対応性と創造性をもっているという見方をしたい。これらはすべて特別な女性ではなく、全員が普通の漁家や漁村で暮らしている女性たちの話である。普通の漁村女性が自分と他者が豊かに地域社会の中で生活を営むために、日常的に行っていることである。漁村はこのような幅広い女性たちに下支えされているのだ。

漁村地域における「漁村の活力を向上させ、より活力がある漁村づくり」を実現していくためには、漁村地域にとって重要な位置付けている女性たちの力と、女性たちの活動によって形成されたいろいろなネットワークを巻き込むことが必要だと思われる。

7-2 今後の展望・課題

本稿では、漁村づくりにおける女性の役割と可能性に焦点を当てたが、漁村の活性化には女性の努力だけでなく、村や地域のあらゆる主体の参加が必要である。神恵内村の場合、村に存在する問題は複合的な要因によって引き起こされてきた。神恵内村の女性たちは地域の問題を発見し、行動する力を持っている。しかし、すべての問題の解決を女性に頼り、女性たちを「救世主」として扱うことは妥当ではないだろう。

筆者が訪れた北海道の 7 つの漁村の中で、新型コロナウイルスの時期に新しいことに挑戦し始めたのは、地域組織としても個人としても、神恵内村は唯一の村だった。神恵内村の女性たちや漁協女性部が新しいことに挑戦することが、非常に良いことであることは否定できない。しかし、前節で述べたように、彼女たちは普通の女性である。したがって、今後の開発や企画には専門家の指導があれば、より大きな力を果たせるだろうと考える。例えば、女性部の新商品開発によっての地域ブランドの開はとても良いことだが、「女性部」としてのブランドや組織計画を成長させるためには、特に女性部のメンバーが同じ目標を共有し、そのために努力しているかどうかが鍵となり、それが村にどれだけ良い影響を与えられるかを決めるだろう。しかし、女性部や女性たちは自分の仕事を持ち、家事をしているため、商品開発や女性部の活動は彼女たちの仕事ではない。自分と地域の両立の問題も存在していて、今後の課題のひとつといえよう。

神恵内村の女性たちによるさまざまな新しい活動は、ここ数年でさらに展開され始めている。今後の発展の方向性や、それがどの程度持続可能なものなのかについては、さらなる継続的な調査が必要である。

また、本研究では漁村の女性を主な研究対象としたため、女性への聞き取り調査を多く行った。本研究の聞き取り調査では、数人の村の男性や、村の外にいるが村に一時的に住んでいる人にも聞き取り調査もした。しかしながら、2年間の聞き取り調査と参与観察から得る神恵内村についての理解をさらに進めるには、より多くの村民の思いを調査する必要があるだろうと考えられる。それができなかったことはひとえに自らの努力不足であり、今後の課題といえよう。

さらに、本稿の目的は漁村づくりにおける女性たちの力を考察することだったが、本研究では神恵内村の 1 つの漁村のみを調査した。漁村の女性の役割は、地域によって異なる状況で発生するだろう。村の活性化のための女性たちの役割もそうである。今後は地域ごとの漁村の女性の具体的な現状調査が必要だと考えている。

謝辞

「なぜ漁業は男性の産業だといわれるだろう」、そのような疑問からこの研究を始めました。このような一般人の漠然とした思いを具体的な研究に高めていくにあたって、修士課程に進学してから多くの方々のご協力を賜りました。本稿執筆にあたって指導教員として多大なご教授を頂いた北海道大学大学院文学研究院地域科学研究室の宮内泰介教授には大変感謝しております。また論文指導ゼミ等において多くのご示唆を与えてくださった笹岡正俊先生をはじめ地域科学研究室所属の各先生方や、これまでの学生生活の中でゼミやその他の場でも互いの研究について議論し合った先輩方、同期の仲間、特に日本語チェックしてくれた後輩たちにも重ねて感謝申し上げます。

学外においては村田由紀子様や西川由美子様をはじめ、神恵内村の皆様には、聞き取りに応じてくださったり女性部活動に招いてくださったりと公私を問わず言葉に尽くせぬほどお世話になりました。そのおかげで机に向かって文献や論文と格闘するよりもはるかに多くの気づきを得ることができました。心より御礼申し上げます。神恵内村という地と村の人たちとこうして出会えたことは私自身の一生の財産になるものと感じております。また、神恵内村の取材に同行させていただき、その後も他の調査対象地に聞き取り調査の許可の連絡についていつも協力を頂いた北海道信漁連マリンバンク営業推進部の加藤雄一様と柳橋一成様にも重ねて感謝の意を表します。

また修士課程修了までの長い学生生活を送るうえで私の希望や多くの甘えに一切否とわずに受け入れてくれた両親と彼氏、陰ながら応援してくれた祖母や姉など多くの親族に対しても感謝の念に堪えません。

本稿においては地域活性化における「人との繋がり」の重要性を述べてきましたが、何かを始めるにも 1 人では簡単に始められず、かといって他の人とやり取りをすると困難にぶつかり、葛藤を抱えてしまいます。特に私自身、中国では、マンションで大勢の人たちと一緒に住んでいるようなところで育ち、隣の人の名前も知らないぐらいでした。人間関係の希薄な環境で育った私は、実は初めて村に行き、初めて出会った人たちの温かさに触れ、このようなところもあるのかと感動しました。以来、みなさんとお会いするたびに、新しい感動があり、村のみなさん、特にいつも私の面倒を見てくれた村田家のみなさんと一緒にいて、他人と付き合いながら仲良くなるのはこんなに温かいことなんだと初めて知りました。このように、人と人との付き合いの中で信頼関係も芽生えてき、自分もこの研究をきっかけとしていろいろな人と出会うことによって少しずつ変わっていきました。本研究を通じてそうした関係を築けた多くの方々によって自分は支えられているのだとあらためて気づかされました。

これまで私を支えてくださったすべての皆様へ心から感謝の気持ちと御礼を申し上げます。く、謝辞にかえさせていただきます。本当にありがとうございました。

林 天玉（リン テンギョク）

補足資料：神恵内村調査協力者概要

1.MY 55歳女性（1968年生） 神恵内村出身 漁協女性部部长

神恵内村出身出身。小学校と中学校は神恵内村で、高校は岩内の高校。夫のMSさんと一緒に漁業を経営している。MSとNYは幼馴染、1993年に結婚し、2年間は札幌にいた。その後、夫が漁師になったが、その時には女性部に入らなかった。子育てのため5年経ってから、14年前（2009年前後）に女性部に参加した。3年前（2020年）から女性部部长になった。

2.MS 55歳男性（1968年生） 神恵内村出身 古宇郡漁協理事

MYさんの夫。神恵内村出身出身、小学校と中学校は神恵内村で、高校は岩内の高校。札幌大学の経済学部を卒業した後は、札幌の会社に勤めた。MYとは同期生、NYとは幼馴染、1993年に結婚して2年間は札幌の会社に勤めた、漁師になったのが28年前（1995年前後）。今は妻MYさんと一緒に漁業を経営していて、神恵内村漁協の理事である。

3.MA 20歳女性（2003年生） 神恵内村出身 札幌国際大学観光学在学

神恵内村出身出身。小・中学校は神恵内で育ち、岩内の高校を卒業して、今は札幌国際大学で観光学を学んでいる。小学校5年生から松前神楽を始め、村の伝統的な文化・祭りを継承して行きたい思いと村の活性化に貢献したい思いから、観光学を選んだ。

4.MK 23歳男性（2000年生） 神恵内村出身 大学卒業

MAさんの兄、神恵内村出身出身、小・中学校は神恵内で育ち、岩内の高校を卒業。札幌大学卒業。現在は札幌の自動車学校に通っている。現在（2023年）妹のMAと一緒に住んでいる。

5.NY 53歳女性（1970年生） 神恵内村出身 古宇郡漁協管理部課長補佐

父親、祖父が泊村の漁師、母は神恵内村出身、10歳のときに父親が病気で亡くなった後、母と共に神恵内村に引っ越しした。神恵内村出身、小学校と中学校は神恵内村で、高校は岩内の高校。MYさんとMSさんとは幼馴染、今は母と一緒に住んでいて、未婚。26年前（27歳）から古宇郡漁協組合に参加して、ずっと神恵内村漁協女性部にも参加。女性部の財政を管理している。高校卒業した後は岩内町バスターミナルの事務に8年務め、26歳から漁協に転職した。

6.YM 31歳女性（1992年生） 共和町出身 YM漁業部経営者

共和町出身。実家は農業で、小学3年生から農家の手伝いをやっていた。以前の仕事は共和町での介護職だったが、2人目の子供ができたタイミングで仕事を辞めて、神恵内村の仕事を手伝いながら育児している。夫との出会いのきっかけは、友人からの紹介。農家の娘か

ら漁師に嫁ぎ、今年（2023 年）で結婚 9 年目。3 人の子供がいる（1 女 2 男）。一番上の子は小学 3 年生で、下の子は 5 歳 4 歳。長男は漁師になりたいって言うており、船に乗っている。

7.YS 31 歳男性（1992 年生） 神恵内村出身 神恵内村漁協青年部長

神恵内村出身。父（62 歳）、祖父も漁師。漁師になって 10 年、現在は山森漁業部の四代目。神恵内村漁協青年部長。魚価の低さに不満があるため、妻と一緒にネット販売を行い、Youtube を使って神恵内村の漁師生活について発信している。より多くの新しい漁師に村に来てもらいたいと考えている。

8.YK 46 歳女性（1977 年生） 神恵内村出身 民宿女将さん

昭和 52 年生まれ神恵内村出身。父、祖父も漁師。小学校、中学校は神恵内村で、岩内高校卒業後は北海道銀行に務めていた。実家である神恵内村の過疎化を憂い、村の活性化に貢献したいという思いから起業した。現在は「きのえ荘」という民宿を経営しており、村に関する商品開発も行っている。2001 年に結婚。夫とは小中学校が同じで、知り合いだった。子供 2 人(女の子)がいる、17 歳と小学校。今は夫と一緒に宿の仕事をやっている。民宿の掃除や炊事にバイトを雇っている。しりべし女子会会長、神恵内村魅力創造研究会 事務局長、しりべし未来ネットワーク 副リーダー、日本全国がんばる女将の会などの 17 個の地域組織に参加している。

9.EC 67 歳女性（1956 年生） 積丹郡積丹町美国町出身 前漁協女性部部长

美国町(びくにちょう)出身、親は漁師、兄弟は弟が 2 人いる。兄弟の長男は札幌の電気会社に勤めていて、次男は、体を壊して実家で一人暮らしている。24 歳で結婚し、現在長男と一緒に住んで、金田一漁業部でアルバイトをしている。子供は男の子が 3 人。長男と 3 男が神恵内にいて、泊村の警備員、次男は岩内に住んでいる。夫(亡くなって 5 年目)は神恵内出身。結婚した時の夫の仕事は、6~12 月が雪崩防止の網を作る仕事で、よく北海道内部に出張していた。12 月の途中~5 末は漁師の仕事だった。16 年前、夫は雪崩防止の網の仕事を辞めて、漁師になった。20 年女性部部长務めた。結婚した後、10 年間子育てをし、30 年前に女性部に参加。その何年か後に副部长から女性部部长になった。

10.OS 34 歳女性（1989 年生） 岡山出身 地域おこし協力隊員 1 年目

岡山県出身、以前の職場は飲食店（鍋の店）で働いて、異なる生活を体験したいため、2022 年 10 月に協力隊に参加した。現在神恵内村役場で職員を務めている。

11.KK 男性 神恵内村出身 地域おこし協力隊員 2 年目

神恵内村出身、小中高とここで育って、高校卒業のときに札幌で専門学校に 2 年間通っ

た。卒業した後札幌で3年間仕事をし、仕事を辞めて戻ってきて協力隊に参加した。協力隊に入った最初は水産の仕事をしたが、今は富士通 DX 事業の現地サポートの仕事をしている。

12.YKS 男性 旭川出身 地域おこし協力隊員 5年目

高校を卒業して大学のあるときに札幌に来て、旭川に18年住み、その後札幌に18年間住み、2018年から神恵内地域協力隊員になった。地域おこし協力隊の仕事はコロナの影響で延長して5年間。今年が最後で、終わった後、起業（紙芝居）する予定である。

13.YH 39歳（1984生） 女性 札幌出身 移住者

札幌で生まれ育ち、高校卒業後は漫画の専門学校を卒業した。夫（40歳）は、旭川出身で、札幌で働いていた。現在は神恵内村の役場で働いている。結婚して札幌で子供が一人いて、3人で札幌で暮らしていた、5-6年前、夫が転職するため神恵内村に移住して来て、下の子生まれた。

14.FC 男性 千葉県 富士通神恵内村 DX 事業マネージャー（来年まで）

千葉県出身、北海道大学農学部—アメリカ農業交流 2年—北海道大学農学院修士、2019年卒業、富士通に入った。現在は神恵内村 DX 事業マネージャーを務めている。

神恵内村では、村長が富士通に連絡し、2019年から陸上養殖のシステムの設計を富士通に依頼。その陸上養殖の事業をする過程では、村は水産業だけではなく、医療、教育、スポーツなどの他の課題も富士通の DX 事業で解決していきたいという思いがあった。そこで、2020年から全面的に富士通の DX 事業と連携し、コロナにおける交流困難のため、村に富士通の人材が派遣された。総務省の地域活性化企業人という制度を使っの派遣。

15.IM 47歳（1976生） 女性 神恵内村出身 居酒屋経営者

父親と母親は居酒屋と雑貨屋を営んでいた。父は亡くなった。16歳離れた姉がいる。結婚したのは、3年くらい前。20年くらい付き合った夫とは幼馴染。高校卒業後は札幌の大学に進学したが難病のため8年くらい入院した。村の人たちの優しさが自分を救ったと言う。

16.IK 82歳（1941生） 男性 神恵内村出身 村の「生き字引」、元役場職員

82歳 男性 神恵内村出身、元役場職員神恵内村の“生き字引”。小樽・後志地区社会福祉協議会連絡協議会 社会福祉法人 神恵内村社会福祉協議会 会長

参考文献・参考資料

- 岩崎繁野, 1971, 「日本のあまの現状について」 『労働の科学』 47 (4) : 198-212
- 今村薫, 1988, 「石垣島における漁民の妻の社会的役割」 『季刊人間学』 20 (3) : 129-186
- 熊井治男・友田清彦・北田紀久雄, 1992, 「農漁村における女性の役割と生活に関する一考察 : 三重県鳥羽志摩農協婦人部アンケート調査から」 『農村生活研究』 3 : 15-20
- 加瀬和俊, 1992, 「沿岸漁業における就業構造に関する研究」 水産庁『水産経済研究』 49
- 三木奈都子, 1993, 「アマ漁業における女性就業、- 老岐島八幡浦の事例的考察 - 漁業経済研究」 36(1) : 27-49
- 瀬川清子, 1995, 『海女記』 未来社
- 児玉いずみ・松本卓也・中内勲・長野章, 1999, 「漁村の女性に関する問題点と漁港漁村整備」 『海洋開発論文集』 15 : 647-652
- 中道仁美, 1995, 『2001 年に向けて——新しい農山漁村の女性』 創造書房
- Putnam R, 2000, Bowling alone: the collapse and revival of American community. Simon Schuster(= 2006, 柴内康文訳) 『孤独なボウリング—米国コミュニティの崩壊と再生—』 柏書房
- 小林時正, 2002, 「北海道におけるニシン漁業と資源研究」 『北水試研報』 62 : 1-8
- 片岡義晴, 2003, 「農村活性化と「女性起業」の展開—岩手県二戸市を事例に—」 『法政大学文学』 48:121-136
- 副島久実・村上幸二, 2004, 「漁村女性起業グループ活動の持続条件に関する一考察 —高知県宿毛湾地域を事例として—」 『農村計画学会誌』 34 (4) : 461-469
- 秋津元輝・藤井和佐・澁谷美紀・大石和男・柏尾珠紀, 2007, 『農村ジェンダー—女性と地域への新しいまなざし』 昭和堂
- 中道仁美, 2008, 『女性から見た日本の漁業と漁村』 農林統計出版株式会社
- Bodin and Crona BI, 2009, 「The role of social networks in natural resource governance what relational patterns make a difference, Global Environ Chang 」 19(3): 366-374
- 漁村活性化のあり方検討委員会, 2009, 「漁村活性化のあり方について中間取りまとめ」 水産庁 : https://www.jfa.maff.go.jp/j/study/bosai/pdf/0708_07.pdf
- 副島久実, 2010, 「瀬戸内海における沿岸漁船漁業の夫婦操業の特徴—山口県宇部地区を事例として—」 機関テクニカルレポート技術報告書, 127-135
- 関いずみ, 2010, 「女性の海上作業の実態と漁場後継の形態—岡山県牛窓地区を事例として—」 東京水産振興会『沿岸漁業における漁家世帯の就業動向に関する実証的研究—平成 21 年度事業報告—』, 115-126
- 荒 一能, 2011, 「瀬戸内海漁村における女性の働き—畑作の消滅と漁業の専門化から—」 『常民文化』 34 : 83-97
- 小泉聡美, 2013, 「北海道漁村における女性活動と地域水産振興施策との関連に基づく活動支援」 『調査研究論文集』 漁港漁場漁村総合研究所 23 : 67-73
- 池口明子, 2013, 「アマの行動から見る持続的な資源利用と環境認識」 林紀代美編『漁業, 魚,

- 海をとおして見つめる地域』冬弓舎,124-134
- 徳野貞雄・柏尾珠紀,2014,『T型集落点検とライフヒストリーでみえる 家族・集落・女性の底力: 限界集落論を超えて』農山漁村文化協会
- 八巻一成・茅野恒秀・藤崎浩幸・林雅秀・比屋根哲・金澤悠介・齋藤朱未・柴崎茂光・高橋正也・辻竜平, 2014,「過疎地域の地域づくりを支える人的ネットワーク—岩手県葛巻町の事例—」『日本森林学会誌』96(4): 221-228
- 小泉聡美, 2014,「北海道漁村における漁協女性部の活動の役割:時代的社会的背景との関連と活動者の意識構造に基づいた分析」北海道大学 博士(水産科学) 甲第 11323 号
- 藤田昌子,2015,「漁村における女性起業活動の課題と支援策—海の恵みを生かして私たちの経営改善—漁村女性による経済活動の取組事例をもとにして」『愛媛大学教育学部紀要』62: 213-219
- 副島久実,2015,「漁業の陸上作業労働における女性従事の特徴と変化」『漁業経済学会』59(2): 75-91
- 藤田昌子・若林良和,2015,「漁協女性部の組織・運営体制づくりとその課題—愛媛県南予地域における事例をもとに—」『地域漁業研究』56(1): 1-31
- 澤野久美, 2018,「地域づくりにおける農村女性起業の役割と課題—個人経営を事例として—」『農村計画学会誌』37(1): 25-28
- 飯島絵理,2018,「地方創生と男女共同参画の推進—漁村女性の現状と支援を中心に—」『国立女性教育会館』8: 43-64
- 副島久実・三木奈都子・関いずみ,2020,「漁村女性のこれまで、そしてこれから—全国漁協女性部連絡協議会 60 周年を記念して—」『水産振興』54(7): 1-41
- 飯島絵理,2018,「地方創生と男女共同参画の推進—漁村女性の現状と支援を中心に—」『国立女性教育会館』8: 43-6
- 副島久実,2020,「漁村における暮らしの改善活動の課題と展望—女性グループ活動を中心に—」『協同組合研究誌にじ』678: 30-37
- 小川理恵,2021,「女性たちがつむぐ「協同組合間協同」—佐賀県協同組合女性連絡会が取り組む「水と環境を守る活動」から—」『協同組合研究誌 にじ』678: 47-55
- 神恵内村郷土資料館, 2023 年 7 月見学で得た資料内容より

参考 web ページ

男女共同参画局, 1999 : https://www.gender.go.jp/about_danjo/society/index.html 最終閲覧日 : 2023 年 11 月 21 日)

GD Freak 神恵内村の人口と世帯 <https://jp.gdfreak.com/public/detail/jp010050000001001404/16> (最終閲覧日 : 2023 年 12 月 25 日)

後志総合振興局神恵内村(北海道) : <https://graphtochart.com/japan/kamoenai-mura-percentage-distribution-of-total-population-65-and-over.php> (最終閲覧日 : 2023 年 11 月 30 日)

神恵内村のホームページ : <https://www.vill.kamoenai.hokkaido.jp/hotnews/detail/00000234.html> (最終閲覧日 : 2023 年 12 月 15 日)